

# 那珂 53

—那珂遺跡群第117次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1034集



2009

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、博多区那珂6丁目地内における水道管埋設工事に先だって行われた那珂遺跡群第117次調査の成果の報告書です。

本調査では、弥生時代初めにおける最古の環濠集落の一部をはじめ、飛鳥時代の区画溝や大型建物、中世の大溝など、弥生時代から中世にいたる遺構を検出しました。特に飛鳥時代の遺構群は、正方位に区画された初期官衙（古代の役所）の一部である可能性があり、周辺一帯に広がるものと推定されます。その詳細な実態の解明は今後の課題となります。この地域の歴史を考える上で重要なものとなる可能性があり、今後、その歴史的な評価や検討が深められることになると思われます。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂きましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施についてご理解をいただき、多大なご協力を頂いた水道局をはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表す次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成19（2007）年6月4日から同年9月28日まで発掘調査を実施した、福岡市水道局が行った水道管の新規埋設工事に伴う那珂遺跡群第117次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、欄列・ピット列をSA、擧立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土坑をSK、性格不明遺構をSX、柱穴および性格不明のピットをSIとしている。遺構番号は、調査時の番号をもとに一部整理・修正して報告した。
3. 本書の遺構実測図に用いる方位北は、特に断りのない限り国土地理院基準北極である。国土地理院は日本測地系（第II系）であり、座標北は真北より $1^{\circ} 12'$ 西偏する。各調査区内の座標は任意であるが、水道局が周囲道路に設置した国土地標測量杭より座標値を移動して調査区の国土地標上の位置を求めている（Fig.3～6）。標高は、教育委員会埋蔵文化財課が那珂遺跡群周囲に設置した測量基準杭のレベルから移動して用いている。
4. なお、既存調査区の位置をはめ込んだFig.3～5は、各報告書掲載の調査区位置図をもとにして道路台帳地図にはめ込んで作成した。ただし一部調査の報告書掲載図には、現地の状況や隣接調査区との位置関係に矛盾が生じているものがあり、隣接調査区における同一遺構の位置関係や福岡市埋蔵文化財センター所蔵の原図を参照して各調査区の位置がより矛盾が少ないように修正して作成した部分がある。またFig.3における試掘調査トレンチの位置は、埋蔵文化財第1課事前審査係の試掘調査報告書から引用し、道路台帳地図上にトレンチ位置をはめ込んだものである。
5. 本書に用いる遺構実測図は、主に久住猛雄（埋蔵文化財第1課）が作成したほか、林智久（早稲田大学学生）、角信喜（東海大学生）、平ノ内武史（別府大学大学院生）、兼田ミヤ子（発掘作業員）、星野恵美（埋蔵文化財第1課）が一部を作成した。遺構実測図の製図は、坂井かおり、成清直子（以上、整理作業員）が行った。
6. 本書に用いる遺物実測図は全て久住が作成した。土器の拓本採取は宇野美嘉、坂井、成清（以上、整理作業員）が行った。遺物実測図の製図は成清が行い、久住が補足・修正した。
7. 本書に用いる遺構写真および遺物写真は久住が撮影した。使用した写真には、35mmカメラおよび6×7判カメラによる白黒フィルム写真と、デジタルカメラ（一眼レフ、コンパクトカメラ）によるデータ画像の両者がある。
8. 本書の編集・執筆は久住が行った。ただし、自然科学分析については（株）バレオ・ラボの報告による。
9. 本調査に関わる出土遺物と記録類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

## 目 次

### 本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	2
3.	遺跡の立地と歴史的環境	2
II.	調査の記録	6
1.	調査地点の位置と周辺の調査	6
2.	確認調査の概要と遺跡の層序	6
3.	本調査の経過と概要	9
4.	検出した遺構と遺物	12
(1)	A・B区	12
(2)	1 A区	17
(3)	1 B区	18
(4)	1 C区	20
(5)	2 A・B区	20
(6)	2 C・D区	25
(7)	3 A・B区	28
(8)	3 C区	32
III.	自然科学分析	32
1.	放射性炭素年代測定	33
2.	木材の樹種同定	34
3.	分析結果について	35
IV.	まとめ	35
・	飛鳥時代の大型建築物と周辺の官衙的 遺構群について	35

### 挿図目次

Fig. 1	那河遺跡群の位置と周辺遺跡分布図	3
Fig. 2	那河117次調査地点の位置 (1/4,000)	6
Fig. 3	那河117次周辺調査区位置図 (1/1,000)	折込表
Fig. 4	那河117次A・B区、1 A～1 C区調査区位置図 (1/300)	折込裏下段
Fig. 5	那河117次2 A～2 D区、3 A～3 C区調査区位置図 (1/300)	折込裏下段
Fig. 6	A区・1 A区平面図 (1/100)	7
Fig. 7	1 B・1 C区平面図 (1/100), 1 C区SA01～03 平面図 (1/60)	8
Fig. 8	2 A～2 D区・3 A～3 C区平面図 (1/100)	9
Fig. 9	A区・1 A区SD01実測図 (1/50)	11
Fig.10	A区・1 A区SD01・02土層図 (1/40)	11
Fig.11	A区・1 A区SD01・02出土瓦 (1/4)	12
Fig.12	A区・1 A区SD01ほか出土物 (1/4)	12
Fig.13	1 A区SK02・SK05実測図 (1/40)	13
Fig.14	1 B区SD03, SD06・07, SD21・22実測図 (1/40)	14
Fig.15	1 B区SD03ほか1 B・1 C区出土遺物 (1/4)	15
Fig.16	1 B区SP08・09・15, SP10実測図 (1/40)	15
Fig.17	1 C区SA01～03断面図 (1/60)	16
Fig.18	2 A区SX001・002出土遺物 (1/4)	16

Fig.19	2 A区SX001・002実測図 (1/40)	18
Fig.20	2 B区SX014ほかビット群実測図 (1/50)	17
Fig.21	2 B区SX014ビット群・SD013出土遺物 (1/4)	17
Fig.22	2 B区SD013実測図 (1/40)	18
Fig.23	2 B区SD013出土瓦 (1/4)	18
Fig.24	2 C区SP1001・1002 (SB01) 実測図 (1/40)	19
Fig.25	2 D区SP1003・1004 (SB02?) 実測図 (1/40)	20
Fig.26	2 C区SP1001出土遺物 (1/4)	21
Fig.27	SB01大型建物実測図 (1/125)	21
Fig.28	2 C区SD004実測図 (1/20)	22
Fig.29	2 C区SD004出土遺物 (1/4)	23
Fig.30	2 C区SD004出土瓦 (1/4)	24
Fig.31	2 C区SP1110, 3 A区SD003出土遺物 (1/4)	25
Fig.32	3 A区SD003・SX006ほか実測図 (1/40)	25
Fig.33	3 A区SX009 (井戸?) 実測図 (1/30, 1/60)	26
Fig.34	3 A区SX008ほか実測図 (1/50)	27
Fig.35	3 A区SX009・SP1010出土遺物 (1/4)	27
Fig.36	3 A区SP1010 (SX009上部) 出土遺物 (1/4)	28
Fig.37	3 B区SD001 (弥生前期環濠) 実測図 (1/40)	29
Fig.38	3 B区SD001 (弥生前期環濠) 出土遺物 (1/4)	30
Fig.39	3 B区SD002実測図 (1/40)	30
Fig.40	3 B区SD002出土遺物 (1/4)	31
Fig.41	暦年較正結果	34
Fig.42	大型建物SB01とその周辺 (復元想定図)	36
Fig.43	那珂37・52・58次溝および建物柱穴出土器	36

### 表目次

表1	2 A区SX001・002, 2 B区SD013土層記	19
表2	2 C区SP1001・1002・1003, SD004, 3 A区SD003・SX006土層記	24
表3	3 B区SD001・002土層記	31
表4	測定試料及び処理	33
表5	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	33

### 本文中写真 (Ph.) 目次

Ph. 1	調査対象地 (3区北) の現況	6
Ph. 2	確認調査開始時状況 (3区北)	6
Ph. 3	確認調査時大型柱穴 (SP1001) 検出状況	7
Ph. 4	B区 (到達) 区 全景	9
Ph. 5	1 B区本調査状況	9
Ph. 6	2 B区本調査状況	9
Ph. 7	1 B区SD003検出状況 (確認調査)	13
Ph. 8	3 C区全景	32
Ph. 9	木材組織の光学顕微鏡写真	35
Ph.10	分析木材資料	35

表表紙写真 左上：2 C区SP1001土層／右下：2 C区SP1001・  
1002／右上：3 A区SX009／右下：3 B区SD001  
(弥生前期環濠)

裏表紙写真 左：A区調査状況／右：2 C区調査状況

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成19（2007）年4月20日付で、福岡市水道局浄水部浄水施設課より、博多区那珂6丁目地内における水道管（送水管）の布設工事について、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課事前審査係に埋蔵文化財の事前審査依頼が提出された（事前審査番号19-1-14）。これは近年における都市化の進展に伴う都市部の水道消費量の増大を背景として、浄水場再編事業が計画されており、乙金浄水場から高宮浄水場（配水池に再編予定）に送水する新設の送水管布設工事を年度内に完了させるというものであった。工事は既存道路の一部について、幅1.9mで延長約343mを掘削するという計画であった。しかしながら、事業地は那珂遺跡群という市内でも有数の大遺跡の範囲内にあり、事業対象地に隣接して平行する道路拡張工事（歩道整備工事）に先立って行われた調査で遺構が検出されていることや（那珂52・53・59次）、近接する那珂37次調査地点で確認された「最古の環濠集落」の環濠の延長部分が存在すること予想されるなど、工事に先立って埋蔵文化財の調査が必要になる可能性が高いと考えられた。したがって、埋蔵文化財の記録保存のための調査の実施はおよそ前提の上で、年度内に発掘調査と、続く工事までを完了するための方法と工について、水道局との間で事前協議が行われた。

協議の結果、先行して工事する必要のある事業地内南側の「発進」「到達」堅坑工事区（後の調査A・B区）については、まず矢板設置など事前工事作業を行った上で堅坑を造構面まで掘削し、造構が確認されれば、必要期間を確保してすぐに調査に入ることが決定された。残りの約330mについては、道路の占有許可の関係上、一定間隔ずつに分けて確認調査を行い造構の有無を確認し、その日のうちに試掘部分を埋めて道路を仮復旧するという作業を繰り返すことになった。造構が確認された範囲については、確認調査が全て終わった後に、道路の交通確保との兼ね合いで可能な範囲に分けて少しずつ調査していくこと、調査が終了部分から水道管布設工事が後追いしていくということになった。確認調査および本調査の工程の基本方針はこのようなものとなり、さらに具体的な掘削作業日程などは、水道局が事業を発注した工事請負業者の担当者もまじえて協議し、随時調整していくことになった。

平成19年5月21日（以下、「5/21」と記述）には、事業予定地の一部を先行して試掘し（後の2C-2D区間付近）、地表下-80~110cmで鳥栖ローム地山ないし包含層を確認し、造構の遺存が予想された。5/29には、別地点で試掘が行われ（後の2A区）、搅乱が顕著であったが-150cmローム地山を確認し、造構の遺存可能性を追認した。さらに同日には「発進」「到達」堅坑の掘削がなされ、地山上面に造構を確認し、先行工事部分は急ぎ本調査をする必要が生じたため、この部分の調査期間や予算について水道局との間で先行して合意に達した。これを受け、5/31に事前の現地協議を行い、6/4より本調査に入った。先行工事部分の調査は6/12に終了した。続いて6/19より、残りの事業予定地についての確認調査を行った。確認調査については、重機による掘削工事などは水道工事事業自体の一部として行われ、これに調査担当者が立会い、記録するという方式をとった。確認調査は7/18に終了した。確認調査の結果を受け、本調査範囲を定め、調査予算を積算した。前述の通り調査区を細かく分けた場合に各何日かかるかという調査日程を確認調査結果から予想し、それに基づいた工程で、表土掘削などの事前工事と調査を順次完了していくような工程を工事側と調整した。この方法は、一度の道路占有範囲が限定されることや、舗装剥ぎや廃土搬出あるいは覆工板の設置が一部で必要になるなど、工事請負業者の協力の必要上からの措置である。このような過程を経て、先行工事部分を除く残りの事業予定地の本調査を7月末から9月末にかけて実施することで水道局との間で合意に達し、7/31より本調査を開始するに至った。その後、調査の進行や天候状況、調査終了部分の工

事の進捗状況を見ながら工事側との工程調整を繰り返したが、9/28には無事に本調査を終了することができた。

## 2. 調査の組織（平成19年度は本調査年度、平成20年度は整理・報告年度）

調査委託 福岡市水道局浄水部浄水施設課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

調査総括 埋蔵文化財第1課長 山口謙治 埋蔵文化財第1課調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課管理係 鈴木由喜（平成19年度）、古賀とも子（平成20年度）

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 星野恵美（事前協議および一部確認調査担当）

調査担当 埋蔵文化財第1課調査係 久住猛雄（確認調査、本調査および整理・報告担当）

本調査においては、発掘作業員の方々の協力を得た。整理作業は、担当者の指示のもと、宇野美嘉、坂井かおり、或清直子、松下伊都子が行った。建物柱穴出土の柱材残片の樹種同定と放射性炭素年代測定については、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した。本調査においては、調査の条件整備や、舗装切断、表土掘削、廃土搬出、矢板・覆鋼板設置など調査に伴う諸工事などについて、調査を委託した水道局浄水施設課および透水管理工事の請負業者である筑神興産株式会社など工事関係者の方々には多大なるご協力を得た。これら関係各位の方々には、あらためて感謝を申し上げたい。

## 3. 遺跡の立地と歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央やや北側にあり、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する（Fig.1）。南方の春日丘陵から北に延びる段丘は、那珂の南側に接する五十川遺跡付近で狭くなるが、北に続く那珂遺跡群では段丘の幅が広くなる。北側の比恵遺跡群や、南側の五十川遺跡とは連続した分布にあり、これらは同一段丘上に立地する。特に比恵遺跡群とは、那珂との間に鞍部（浅い谷状地形）があるが、遺構分布や時期的な展開の様相から、弥生時代から古代においては実質的に同一の遺跡群と捉えられ、「比恵・那珂遺跡群」とも総称されている（田崎博之1998）。比恵・那珂遺跡群は、中世以降の開墾や屋敷地（城館）の造成、近現代の区画整理や都市化による地形の変形や削平が著しく、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない場合が多い。しかしながら、地点によっては多くの遺構が密集して遺存していることもある。周囲に比べて地形が高く残る土地や、逆に旧地形が低く削平度が少ない場合は、遺構の著しい重複によって遺構の平面プランが不明瞭となり、「包含層」状になっていることもあります。確認調査などにおいては要注意である。比恵・那珂の標高は、地形の削平部分も考慮すると最高所が12m前後、低いところ5m前後であり、一定の起伏がある。比恵・那珂遺跡群の範囲は、南北2.4km、東西0.5kmから最大1.0kmの100ha以上に及び、特に弥生～古墳時代の遺跡としては全国的に最も最大規模な部類に入るものである。本報告においては、弥生時代から古墳時代前半期の比恵・那珂の概要や周辺遺跡の解説については省略する。これらについては、福岡市埋蔵文化財調査報告書（以下、「市報告」とする）第639集（那珂68次報告）、第713集（那珂73次報告）、第956集（比恵100・102次報告）に詳述したがあるので参照されたい。以下、那珂117次で主に検出した飛鳥時代（6世紀末～7世紀）の遺構群に関わる遺跡について主に記す。

比恵・那珂では弥生時代中期から古墳時代前期前半までは大規模な集落が形成されたが（久住猛雄2008）、古墳前期後半には遺構が激減し、古墳中期の遺構・遺物は非常に少なくなる。しかし、古墳時代中期末（須恵器TK23～TK47期）に剣塚北前方後円墳が築造された前後に集落の再形成が始まる。

6世紀中頃（TK10期）には、三重周溝を有する大型前方後円墳の東光寺剣塚（墳丘長74m前後、総長117m以上）が築造され（福岡市第267・887集）、その後から比恵・那珂は再び大集落となる。6世紀後半～末（ⅢA期新相～ⅢB期）には、比恵8・72次の三本柱柵列区画を伴う大型倉庫群が造営

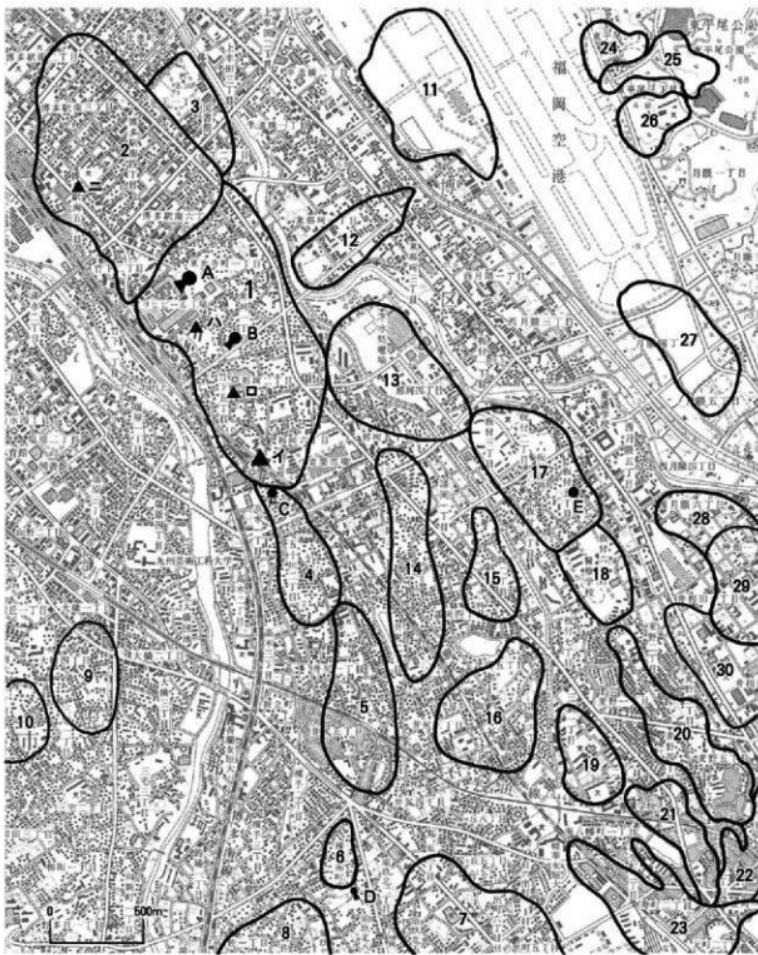


Fig. 1 那珂遺跡群の位置と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 那珂遺跡群 2. 比戸遺跡群 3. 山王遺跡 4. 五十川遺跡 5. 井尻B遺跡群 6. 寺島遺跡 7. 須玖・岡本遺跡群 8. 曰佐遺跡群 9. 大橋E遺跡 10. 三宅A遺跡・三宅庵寺 11. 鶴居遺跡 12. 東那珂遺跡 13. 那珂君体遺跡(那珂深ツサ、那珂久平はか) 14. 諸岡A遺跡 15. 諸岡B遺跡 16. 笹原遺跡 17. 板付遺跡 18. 高畠遺跡 19. 三筑遺跡 20. 麦野A遺跡 21. 麦野C遺跡 22. 麦野D遺跡 23. 麦野E遺跡 24. 久保園遺跡 25. 席田大谷遺跡(赤穂ノ浦道路) 26. 宝満尾遺跡(24~26 席田遺跡群) 27. 下月隈C遺跡 28. 井相田D遺跡 29. 仲島遺跡 30. 井相田C遺跡 A. 東光寺剣塚古墳(6世紀中頃) B. 那珂八幡古墳(前期初頭) C. 今宮神社古墳(前期古墳?) D. 須玖御陵古墳(前期初頭) E. 板付八幡古墳(6世紀後半) イ. 那珂37・117次ほか調査(本報告) ロ. 那珂114次調査 ハ. 那珂115次調査 ニ. 比戸8・72次調査(那津官室、国指定史跡)

\*上図の遺跡範囲はおよその範囲を示したものであり、埋蔵文化財事前審査窓口における分布地図上の埋蔵文化財包蔵地の範囲とはやや異なる場合があり、また調査の進展により範囲が変動する場合もあり注意されたい。)

される（7世紀中頃まで存続か）。この倉庫群は、『日本書紀』にある「那津官家」の可能性が評価され、同地点は国指定史跡として保存されている（市報告116・663集）。比恵・那珂の他の数地点（比恵39次・50次・109次、那珂18次・23次）でもⅢ B～Ⅳ期の大型倉庫建物があり、複数の大型倉庫群が並立していたらしい。なお比恵7・13次の三本柱柵列区画（117・596集）は正方位をなし、那珂遺跡群での傾向から、7世紀中頃以降に下る初期官衙遺構群の一部である可能性がある。

初期瓦とされる特異な瓦類を含む6世紀末から7世紀後半の古代瓦が那珂遺跡群の複数地点で出土している（菅波正1994、比嘉えりか2008）。22次では牛頭窯跡群神ノ前窯と同じ成形の「神ノ前タイプ」瓦が出土し（253集）、Ⅳ期古相（600年前後）の土器を伴い、九州最古の瓦とされる。「神ノ前タイプ」と、やや新しい瓦として確立した次の「月ノ浦タイプ」までを出土した23次の溝は（290集）、近年の114次の成果から大型建物を伴う一辺90mの方形区画の一部となることが判明し、6世紀末から7世紀中頃（Ⅳ期）の初期官衙遺構であろう。23次の区画溝外側西方には倉庫群がある。「官衙」とした場合、「評」制以前であり、その位置付けが課題である。那珂の南端の37・51・56・117次でも7世紀中頃～後半の大型建物ないし二本柱柵列が検出されている（366・525・500集および本報告）。他にも68次（639集）など、古墳時代後期末（Ⅲ B期）～飛鳥時代（Ⅳ～VI期）の大型建物や倉庫群が複数地点で検出されている（菅波正1996および那珂68次報告参考）。115次では初期瓦を伴う7世紀中頃～後半の建物と、重複する7世紀初頭～7世紀末の建物群が検出された（983集）。那珂の初期瓦については、堅穴住居土例もあり（13次・32次など）、堅穴住居に使われたという意見さえもあったが、115次で瓦が確実に伴う大型建物が検出され（7世紀第3四半期、V期前後）、相応の建物に瓦が葺かれていたことが判明した（注1）。牛頭窯跡群の須恵器窯で初期瓦が焼成されているが、その主要な消費地は那珂の官衙の遺構群である。115次では、初期官衙の可能性がある建物群は、Ⅳ期新相（7世紀中頃）以降に正方位を指向するという変遷が明らかになった。これに関連して、那珂遺跡群や南に接する五十川遺跡では、Ⅳ期新相（7世紀中頃）からVI期（7世紀末）の遺物を出土する溝や建物の多くが正方位を指向し、広域の正方位地割と計画的な官衙城形成を予測する意見もある。

このような初期瓦（注2）の存在や大型建物、大型倉庫群などがある6世紀後半～7世紀代の比恵・那珂の評価については、「那津官家」のほか、初期の「評衙」、さらには『日本書紀』の記述を参考し、大宰府政府成立以前の「筑紫大宰」、あるいは「長津宮（＝磐瀬宮）」、「筑紫大郡」といった国家的機関（施設）の可能性も含めて検討されるべきである。7世紀代中頃までの瓦の出土は畿内の寺院以外では非常に稀なものでありその意味が問われ（注3）、『日本書紀』の記述から「那津」「（那大津」とも）に外交・軍事拠点があったのは間違いくなく、遺跡群の様相からそれは比恵・那珂遺跡群に該当する蓋然性が高い（白井克也1998、長澤一1994など）。これに関連して、「大宰府政府I期」（7世紀後半～8世紀初頭）のうち、その前半期には特に顯著な官衙遺構群は展開せず、「筑紫大宰」の中核施設として整備されたのは「I期新段階」とされ、飛鳥淨御原令（681年以降）段階の可能性が高い（吉村靖徳2003、杉原敏之2007）。つまり、「政府I期古段階」（680年代初頭以前）の「筑紫大宰」の実質的な拠点は、依然として那珂遺跡群にあった可能性も考慮されよう。少なくとも、那珂は7世紀末～8世紀（VI・VII期）にかけても、古代瓦や硯の出土、道路遺構の存在（122次）、多数の井戸の掘削など、評（郡）衙のような地域の拠点が存在した可能性が高い。ただし7世紀末から8世紀初頭には、南方1kmにある井尻B遺跡に官衙遺構群が形成されており、寺院址も伴い（井尻庵寺）、計画的な正方位街区が形成されていた可能性がある（923集）。井尻Bについては、短期間の評（郡）衙である可能性を検討すべきであろう。井尻庵寺とはやや後れる8世紀初頭には、那珂川対岸に三宅庵寺が造営される。この二つの寺院址は同一緯度にあり、計画的な配置であろう。周囲には、三宅瓦窯や老司瓦窯が分布する。



Fig. 2 那珂117次調査の位置 (1/4,000)

さて那珂遺跡群には那珂八幡古墳を造営の端緒とし、その分布の北端となる前期古墳群（周溝墓群）が、「道路」に沿って造営されていることが明らかになっているが（久生監雄1999・2008）、この南端は五十川遺跡北部の今宮神社古墳であろう。この古墳は社殿により著しく削平され、現状は径30mの円墳状となっているが、大正末期の1/3,000地形図では現在よりも墳丘が遺存し、地形が南側に突出しており、全長50～60mの前方後円墳の可能性を指摘できる。現在も西側道路の屈曲はくびれ部の存在を示唆する（Fig. 3）。旧地形図にある「前方部」の形状からは前期古墳と推測することも可能である。

後期古墳では、劍塚北古墳と東光寺剣塚古墳の存在が知られるが、他にも削平された古墳が遺跡群内に散在する（44・79・110・122次）。特に79次の古墳周溝は径20m以上が想定され、IV期前半の須恵器があり、該期としては首長墓級である。これらは、平野周縁の丘陵斜面に造営される多数の群集墳とは一線を画し、特に有力な氏族系譜の墓地であろう。また板付遺跡の南東には大破した石室が露出する板付八幡古墳があるが、現状の残丘からも径30mが推定される。残丘地形が突出する側の社殿建替に伴う調査では、円墳である場合に存在すべき周溝が検出されず、前方後円墳とする見方も成り立つ（717集）。III B期頃の須恵器が採集され、東光寺剣塚に後続する本地域最後の前方後円墳である可能性がある。さらに、福岡平野の東縁にある今里不動古墳（7世紀初頭頃）、平野西側丘陵にある寺塚穴観音古墳（7世紀中頃か）はいずれも径30mになる大首長墓であるが、那珂遺跡群を經營した勢力（在地大首長）との関係を想定するべきであろう。

（注1）那珂八幡古墳の周溝からは（34次）、軒丸瓦を含む7世紀中頃～末と推定される瓦類が多量に出土しており（第365集）、大型建物ではなく、祠のような比較的小規模の瓦葺建物が古墳上ないし古墳の近在に存在したのではないかという説もある。

（注2）定型化した百濟系單弁軒丸瓦が伴う段階以降は「初期瓦」からは外す（比嘉えりか2008）。北陸九州の本格的な瓦生産は春日市ウトロ窯跡（V～VI期古相）からと考えられ、V期（660年代～670年代前半）の幅内に断片があり。この段階に百濟系單弁軒丸瓦なども導入され、VI期に普及したのである。那珂遺跡群には、「初期瓦」に後続するこの段階の古代瓦も多い。

(注3) 現島における石神遺跡において(21次調査)、齊明天皇代(655-661年)と推定される柱立柱建物の一つに、周囲溝跡から大量の瓦が出土し、瓦葺きであったと推定されている(奈良國立文化財研究所による現地説明会資料を参考)。石神遺跡は蝦夷や隼人などの邊境の民や外国からの使節を要する施設とされ、那珂遺跡群の瓦葺建物の性格を考える上でも示唆的である。また朝鮮半島では、百濟や新羅の都において、寺院以外にも瓦葺建物が存在する。対朝鮮半島の外交と軍事の最前線である筑紫の都津において、主要な建物に瓦葺の存在が推定されること非常に重要である。

〔参考文献〕久住猛雄1991「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号/久住猛雄2008「福岡平野・比嘉・那珂遺跡群一列島における最古の「都市」」『集落からゆるむ弥生社会』・弥生時代の考古学8、同成社/白井亮也1998「博多出土高麗土器と7世紀の北都九州」『考古学雑誌』第83巻第4号/皆波正人1994「那珂遺跡群出土の古瓦について」『那珂10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集/皆波正人1996「那津の口の大型建物群について」『博多研究会誌』第4号/杉原敏之「大宰府政庁のI期について」『九州歴史資料館研究論集』32/田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会/長澤一1994「新城「大宰府」の成立」『日本の古代国家と城』新人物往来社/比嘉えりか2008「初期瓦研究の現状と課題—筑前地域を中心に—」『七隈史学』第9号、七隈史学会/吉村靖謙2003「成立期の大宰府政庁に関する試験」『九州考古学』第78号



Ph.1 調査対象地(3区北)の現況(北西から)



Ph.2 試掘調査開始時状況(3区北)

## II. 調査の記録

### 1. 調査地点の位置と周辺の調査

那珂117次調査(以下「117次」とする)は、那珂の段丘の西南縁辺部付近を縦断するように、南東から北西にかけて幅約2m(一部は幅3.4m)、延長約240m(本調査実施区間)の細長い範囲で行われた(Fig.2・3)。調査地の現標高は、南東から北西に向かってやや低くなるが、9.3~8.9mである。周囲では、那珂37・48・51・52・53・56・59・111次の各調査や、五十川遺跡12次調査が行われている。那珂37次などで検出された弥生時代初頭の環濠は、掘削が刻目直帯文土器単純期(夜日IIa式)に遡り、板付遺跡の環濠よりも古いとされ、「最古の環濠集落」と評価された。また、37・52次や56次で検出された飛鳥時代の大型建物ないし柵列も注目される。117次では、これらの遺構の延長部分の確認が期待された。以下、まず確認調査の概要を述べた上で、本調査の記録と成果について記述していく。

### 2. 確認調査の概要と遺跡の層序

調査に至る経緯で述べたように、今回の調査では、先行調査区(A・B区)を除く埋蔵文化財包蔵地内の事業対象地全区間に對して、まず確認調査(試掘調査)を行った。その範囲は、Fig.3の「試掘始点」以下の一点鎖線内と本調査区の範囲であるが、遺構が確認された範囲は約半分に留まった。これは、主として道路建設の際の地盤造成に起因すると考えられる顕著な削平により遺構が失われたものと推定される。確認調査は、1日10~25m長程度を約1.9m幅切削し、この範囲を地山上面まで掘削し(検出下端は幅1.5m前後)、遺構の有無を確認するものであった。廃土は一時的に搬出したが、その日のうちに埋め戻し、夕方までに道路を復旧する必要があったため(これらの実施は水道局と工事請負業

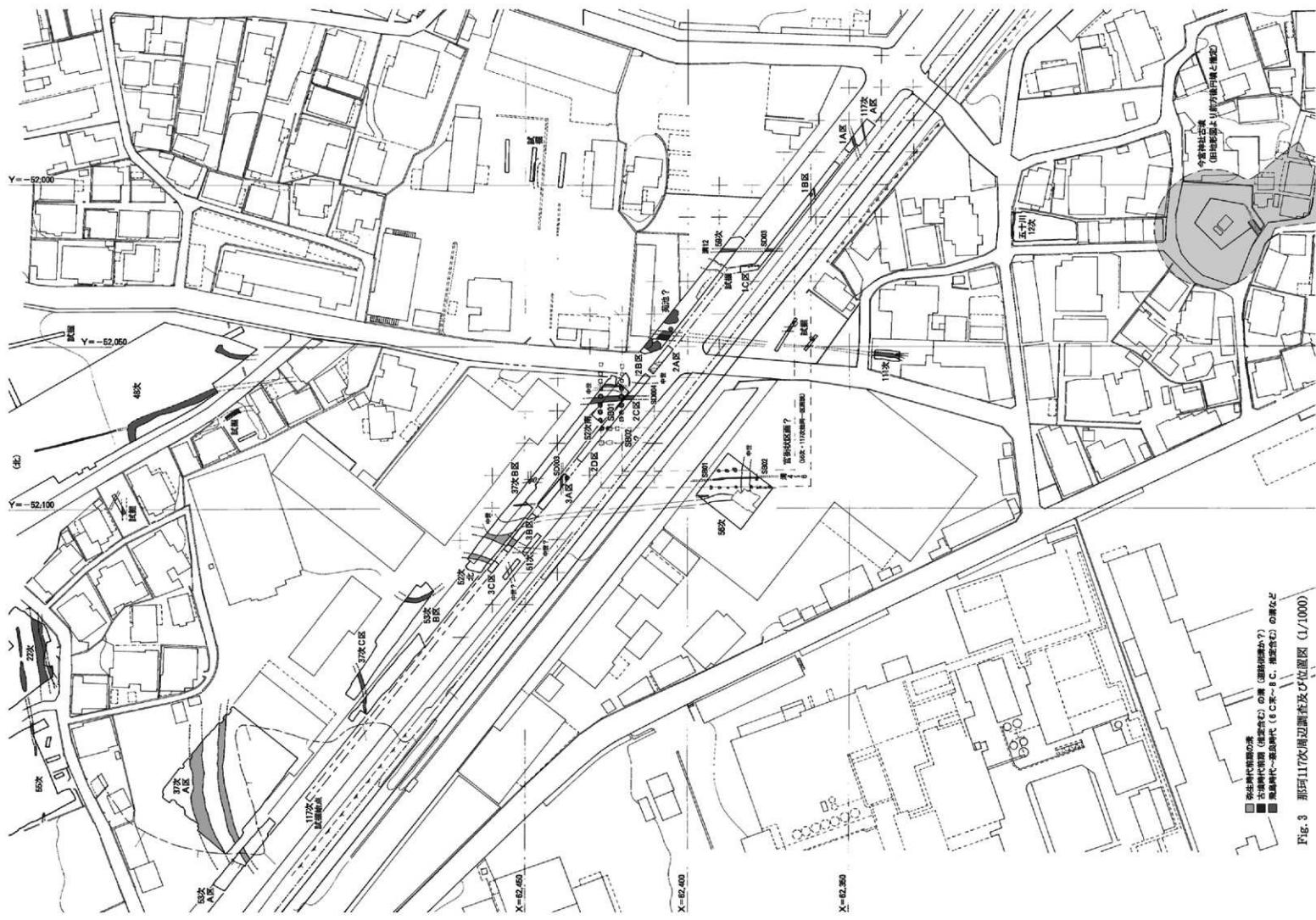


Fig. 3 那珂117次周辺調査及び位置図 (1/1000)

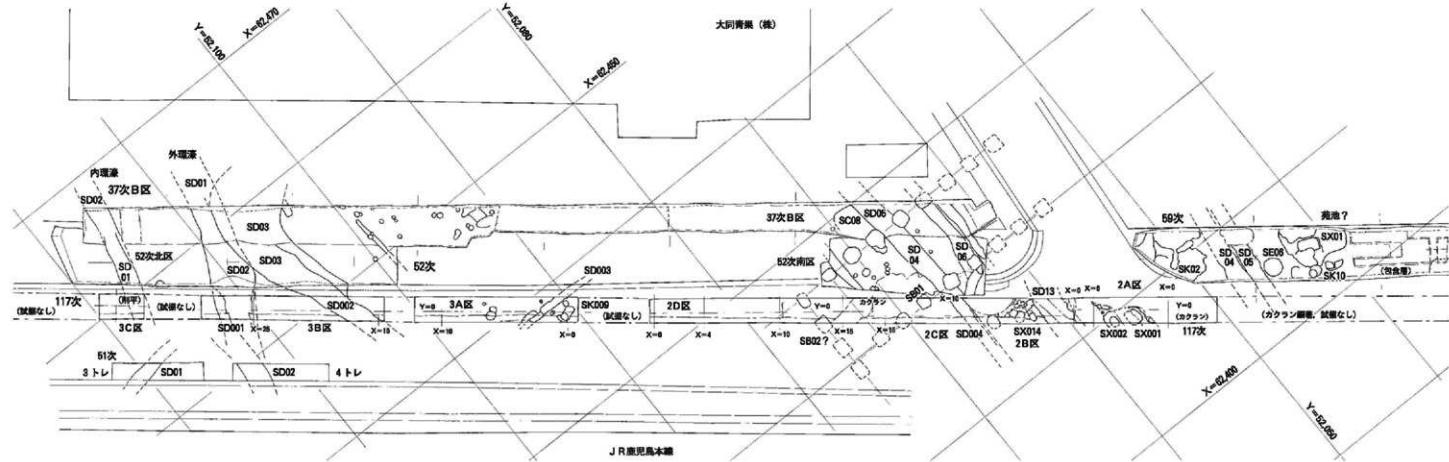


Fig. 5 那珂117次 2 A・2 D区, 3 A~3 C区調査区位置図 (1/300)

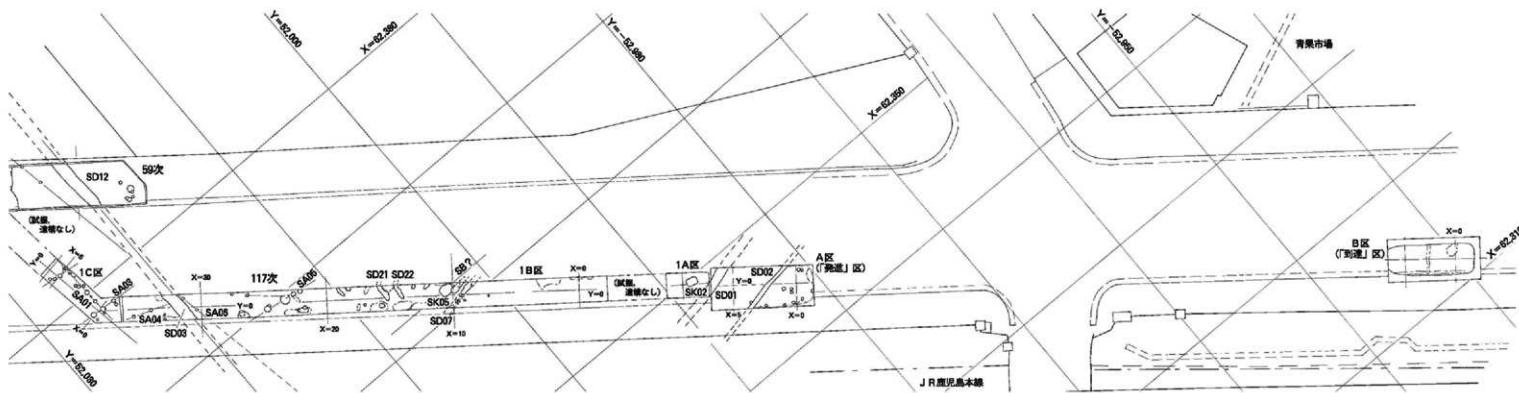


Fig. 4 那珂117次A・B区、1 A~1 C区調査区位置図 (1/300)

者の全面的協力による)、1日の試掘範囲は限定された。

確認調査範囲のうち、道路の北辺側、試掘始点の北西端(Ph. 1・2)から90m地点までは遺構が全く検出されず、本調査対象外とした。試掘始点(0m)から90mから177m地点までは遺構が断続的に検出され、後の調査区「3区・2区」としたが、この区内間でも全く遺構が無かった範囲は本調査としていない。177~210m地点は削平以外にも近現代の搅乱が顕著であり、遺構は全く遺存せず本調査対象外とした。

210m地点から南へ、道路を斜めに横断する区間があるが、その北半分は177~210mと同じ状況であり、遺構は検出されなかった。しかしこの南半分では遺構が検出され、本調査とした(後の1C区)。その後、道路の南辺側を試掘した。先行A区(「発進」工事区)に接する南東端を始点(0m)とした。このうち、南東始点から3~8mの区間は既存水道管があり、また遺構が検出されなかったが、他は道路横断区に接する北西側まで遺構が断続的に検出され、ほぼ全区間を本調査対象とした。

確認調査では、各地点で柱状土層図を記録しており、以下これを記す。なお「GL」は各区での道路面標高であり同一標高ではない。北西試掘始点から90mまでの道路面標高は、北から8.7m~8.5mだが、GL-80~85cm前後で八女粘土地山となった。この間は、上からアスファルト舗装、パラス層、地盤改良真砂土層であり(以下、道路面と地山上面の間はほぼ同じ層順)、道路地盤の造成により削平されたことが分かる。八女粘土の上の鳥栖ロームは削平されていた。旧地形がより高かったと考えられる。始点から90~100mでは(3C区に対応)、道路面が9.0m~8.5m、GL-80~85cm前後で八女粘土ないし一部鳥栖ローム下部となっただ。後の3B~3C区では、道路面が9.0~9.15m、GL-77~80cmで鳥栖ローム地山となった。3A・2D~2C区では、道路面が9.2~9.3m、GL-80~85cmでロームとなり遺構を検出した(Ph. 3)。2B区では道路面が9.25~9.3mだが、地山面がやや落込み、道路造成層下部の真砂土層の下に薄くパラス層があり、この下は暗褐色土の包含層となる。GL-90~100cmでローム地山となり、南東側がやや低い。2A区では、道路面は9.2m前後、深い搅乱が多かったが、北側で真砂土下の一部で包含層が残り(GL-83cm前後)、GL-96cm前後で遺構を検出した。2A区南側の一部では、真砂土下のGL-80cmで二次堆積の包含層(耕作土か)となり、GL-116cm前後で遺構上部の包含層を検出した。2A区より南東側では(試掘始点から177m以降)、



Ph. 3 試掘調査時大型柱穴(SP1001)検出状況(西から)

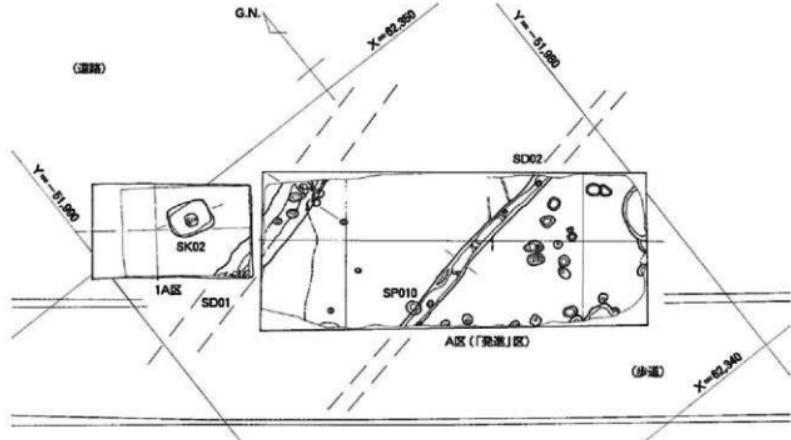


Fig. 6 A区・1A区平面図(1/100)

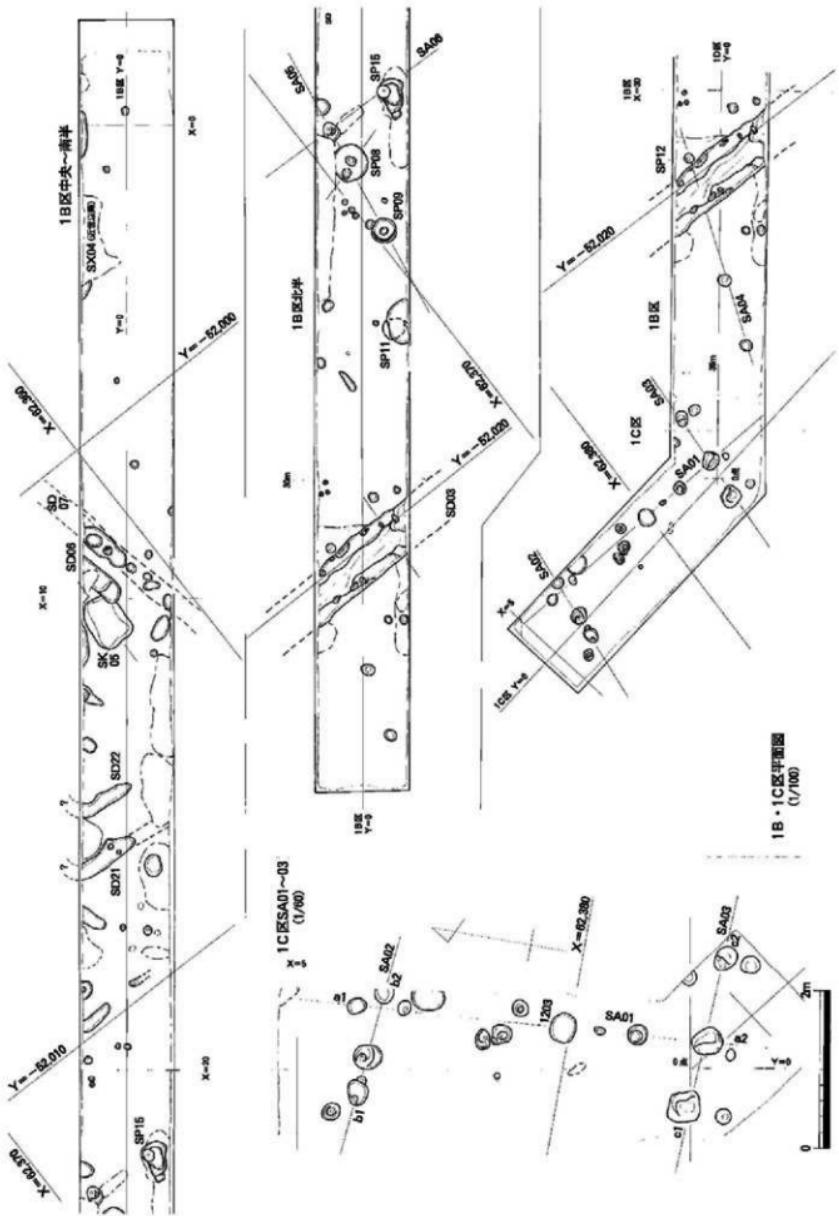


Fig. 7 1B + 1C区平面图 (1/100), 1C区SA01~03平面图 (1/100)

擾乱が著しく深く(GL-130cm以上)、真砂土や瓦礫を含む覆土であり、幅狭い試掘坑では地山面まで深く下ると崩落の危険があったので(部分的に複数箇所をGL-180cm以上下げる確認したが地山に達せず)、途中で掘削を断念した。しかし前後の造構の遺存状況から、この擾乱状況では造構は遺存していないと判断される。同様な状況は試掘始点から205m地点と、そこから南へ道路を斜めに横断する区間の北半分まで続き、これらの範囲は本調査対象からは外した。

次に、道路横断区間の北半分では(1 C区)、道路路面高は9.3m、上からアスファルト・パラ層、改良真砂土層と続いた(対象地北半と同じ)。GL-75~88cmはガラ混じり真砂土+ローム土で、この下で旧水田耕作土層となつた。GL-110cmでロームとなり、造構を検出した。対象地南半の道路南辺の1 B区北側では、道路面は9.27m前後改良真砂土の下のGL-88cm前後で旧水田層となり、GL-104cm前後でロームとなり造構を検出した(Ph.7)。1 B区中央では、道路面は9.22~9.25m、GL-85~100cmで旧水田層となり、GL-105~108cmでロームとなる。1 B区南側では、GL-74~80cmで改良真砂土、GL-82~90cmまでは非改良の真砂土混じり盛土、この下に旧水田層、GL-108~114cmでロームとなる。北側より地山上面が低く、南東側がより深くなる。対象地南半側では旧水田層の上に道路造成の盛土がなされており、造構の削平は主に水田開発時の造構によりなされたものと考えられる。また南東側がより深いのは旧地形の反映であろう。

### 3. 本調査の経過と概要

調査地点は現在道路内である。「発進」「到達」工事区(A・B区)のみ先行して平成19年6月4日~6月12日(以下、日付は「6/4」のように表記)に行ったが、他の「開削」工事区については確認調査を先に行って本調査対象範囲を限定し、7/31より本調査を開始した。「開削」工事区の本調査範囲は、掘削工事の都合から、南北から1・2・3区と区分した(FIG.3~5)。1区の大部分は掘削工事範囲を開放して発掘調査を行なうことができたが、道路幅などの交通上の都合から、1区北側(1 C区)と2・3区については覆鋼板設置工事と矢板埋設を先行して行い、掘削範囲は毎日覆鋼板を開閉して(調査時間のみ覆鋼板を開いて)調査を行った。造構面までの掘削と排土除去は工事側の協力によつたが、調査中の掘削土は調査区内の造構の無い部分に置くなどして場内処理をしている。狭小な調査地であったため事務所などの設置はなく、トイレのみ設置し、休憩は道路際の日陰などで行った。機材類などは、1区調査中は小コンテナ倉庫を利用できたが、2・3区では覆鋼板の下に置くなどして対応した。1 A・B区の調査は7/31から8/10、1 C区は8/17から8/21、2 A区は8/22~8/28、2 B・2 C区は8/28~9/7、2 D区は9/7~9/12、3 A区は9/12~9/20、3 B区は9/19~9/28にそれぞれ調査を行つた。3 C区は途中の9/24に調査を行つた。3 B区の記録作業をもつて本調査を終了し、平成19年9月28日に発掘機材を撤収した。

確認調査の項で述べたように、全体的に削平が著しく、造構は確認できたものの遺存度は良好ではない。しかしながら本来的には造構が多く存在した地点であることが想定できる。調査区南半部(1



Ph.4 B区(「到達」区)全景(北西から)



Ph.5 1 B区本調査状況(北西から)



Ph.6 2 B区本調査状況(北西から)

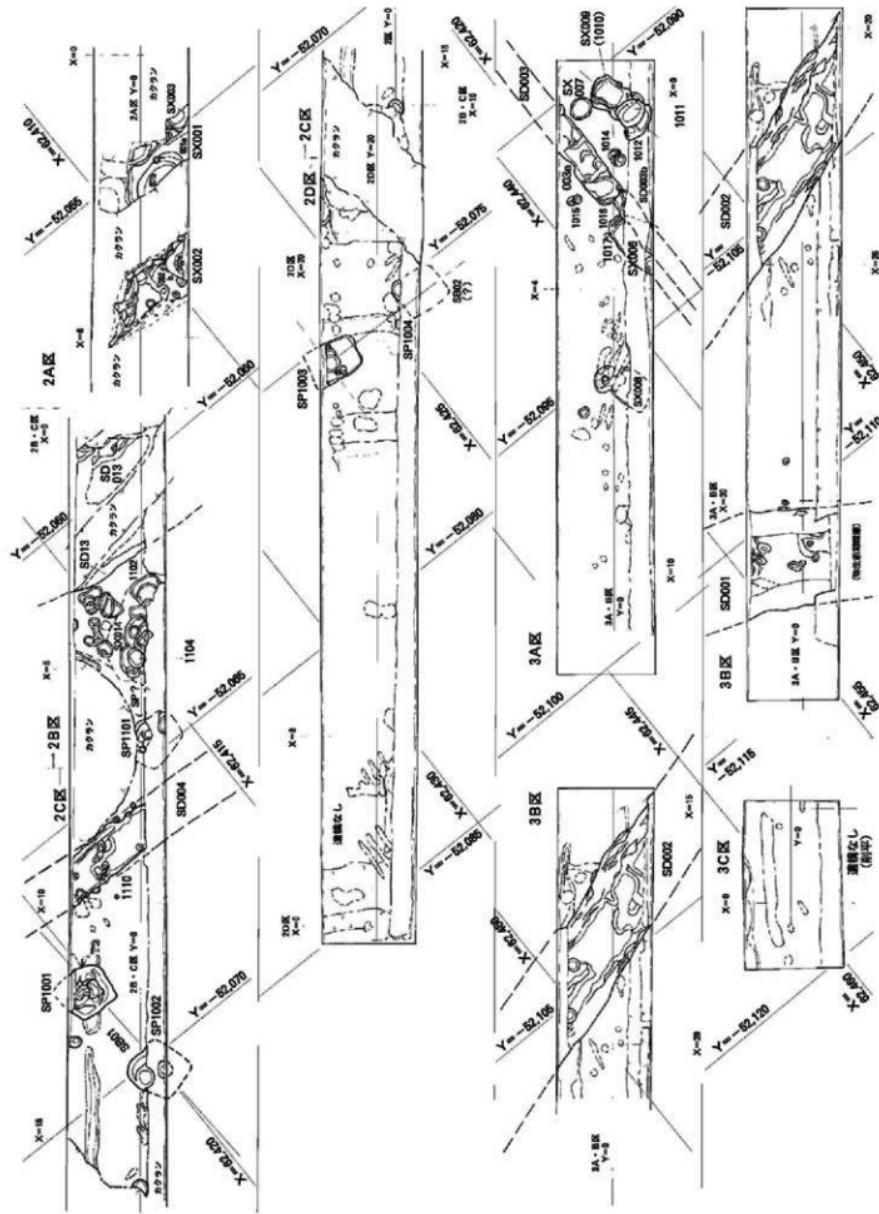
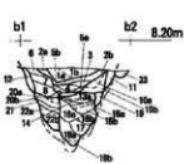


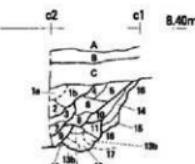
Fig. 8 2 A ~ 2 D区・3 A ~ 3 C区平面図 (1/100)



①A区SD01土層

## A区SD01土層

1. 黒褐色土・土質色より土・しまりあり、土面削れわずか。
2. ローム粘土・含水 (やや多く) 土・しまりあり。
3. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
4. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
5. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
6. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
7. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
8. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
9. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
10. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
11. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
12. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
13. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
14. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
15. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
16. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
17. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
18. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
19. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
20. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
21. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
22. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。



②A区SD01西側土層

(①・②はFig. 9参照)

## 1 A区SD01土層

1. 黒土・ローム土・褐色土・瓦礫
2. 青色・暗青褐色・黒褐色・シルト (泥状土)
3. に高い褐色土・淡褐色土・シルト (泥状土)、柱穴底土・柱穴壁土・柱穴底土・柱穴壁土・柱穴底土・柱穴壁土
4. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
5. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
6. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
7. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
8. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
9. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
10. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
11. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
12. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
13. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
14. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
15. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
16. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
17. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
18. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
19. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
20. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
21. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。
22. 1層より高褐色土 (黒褐色) 側に、ローム粘土や少ない。



## A区SD02土層

1. 基礎土・ローム土・青白熱土粘土 (少し下手)・しまりあり。
2. 黒褐色土 (やや暗褐色土)・沙泥化・み、八女粘土 (灰白色土)・ローム質白熱土小・ブロック・粘土や少く含む (16%以上)
3. に高い灰岩土・ローム質白熱土・高褐色土 (1層よりローム質ブロック)
4. 2層 (黒褐色+青白熱土)・ローム質ブロック多 (に高い青白熱土・ローム質)

(③の土層位置はFig. 8)

区・A区) では、主に飛鳥時代の溝状造構、土坑、柱穴などを検出した。土坑の一つは古い時代(縄文時代?)の落とし穴の可能性があるが確証はない。溝は南北正方位のものと、正方位ではない東西溝がある。調査区北半部(2・3区)でも飛鳥時代の造構が多く、溝状造構、土坑(一部は竪穴住居か)、柱穴を検出した。柱穴には東西正方位の大型柱穴列があり、隣接する37・52次目のSA09の続である。また階段状掘方をもつ7世紀代の大型土坑があるが(SX009)、井戸の可能性が高い。溝は南北と東西の正方位のものがあり、南北溝は隣接調査区に続く。他に平安時代以降の大溝と水路がある。また調査区北端では37・52次で検出された弥生時代初頭の環濠の延長が検出された。

出土遺物の多くは飛鳥時代の土師器、須恵器である。他に奈良時代～中世の土師器、須恵器、輸入陶器、瓦器や、各造構から弥生土器片も出土した。鉄滓が3点ある。環濠からは弥生時代早～前期の弥生土器が少量出土した。また柱穴からは柱材の残欠が1点出土している。石製品が少数出土している。

12. 1層と同じ
13. 1層より高褐色土 (黒褐色) 上・土面・柱根部・小ブロック・柱や柱根部 (やや多く) 黒褐色 (11%)
14. (上) ローム質土 (黒褐色) 黒褐色や砂質土、ローム粘土少く含む、2層より暗褐色泥炭
15. 暗褐色・黑色土、ローム粘土・小・中・大ブロックなし、しまり甘い、ローム粘土や多い、
16. 黒褐色・暗褐色・黑色土、ローム粘土や砂質土、ローム粘土や少く含む (10%～20%)
17. 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色 (10%)
18. 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色 (10%)
19. 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色 (10%)
20. 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色 (10%)
21. 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色 (10%)
22. 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色土・柱根部 (やや多く) 黑褐色 (10%)

Fig.10 A区・1 A区  
SD01・02土層図 (1/40)

Fig. 9 A区・1 A区SD01実測図 (1/50)

#### 4. 検出した遺構と遺物

##### (1) A・B区 (Fig. 4・6)

A区は「発進」工事区 (Fig. 6、PL. 5-1)、B区は「到達」工事区 (Fig. 4、Ph. 4) で、工事工程の都合から先行して調査した部分であり、この両区のみ工事幅に応じて3.4m幅の調査区である。

A区は対象地の南東部分にあり、周囲道路面は9.1～9.15mである。GL-80cmまで道路造成層で、この下は福島を含む青灰色シルトの旧水田層、-110cmで土器片を少量含む茶褐色粘質土(床土)層となる。この下部の標高7.95m前後でローム地山上面となり遺構を検出した。

調査区南隅に略東西のSD01があり (Fig. 9、PL. 5-3)、幅70～80cm、深さ60～70cm、断面Y字または細いV字形の溝である。方向は正東西ではなく、東側が北に若干振れる (N-75°-E)。土層の不整合から数度の掘り直しが推定される (Fig.10上段、PL. 1-6)。上層(土層図1～9層の逆台形部分)からIV期前半～中頃の須恵器と土器部、平瓦が出土したが、最初の掘削はIV期以前の可能性がある。調査区中央には、SD01とほぼ平行するSD02がある (N-80°-E)。幅30cm、深さ10～15cmのみ遺存する小溝だが (Fig.10下段、PL. 2-2)、覆土は黒褐色土で古墳～飛鳥時代の遺構であろう。

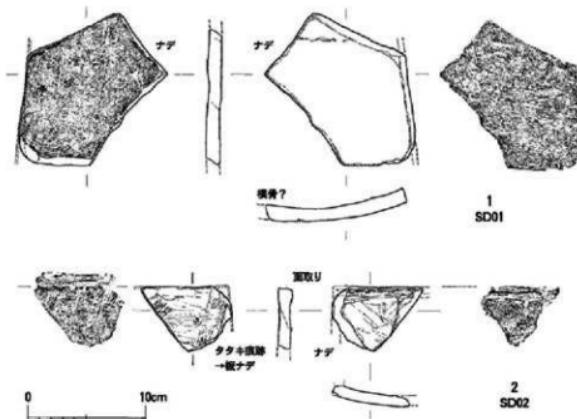


Fig.11 A区SD01・02出土瓦 (1/4)

SD01との間は芯々3.6mであるが、この間は空閑地であり「道路」の可能性もある。あるいは居館などの区画溝としてのSD01の内側に伴う柵溝を構築する布柵溝かもしれない。SD02の南側には小ピット群があるが、いずれも浅く、性格やや時期は不明確である。黒褐色覆土のものもあり、弥生時代～飛鳥時代のピットも含む可能性がある。

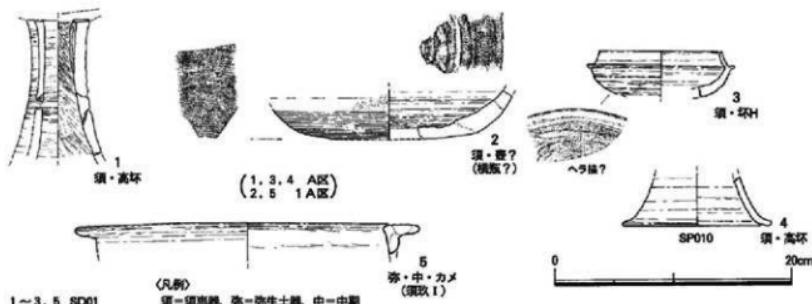


Fig.12 A区・1A区SD01ほか出土遺物 (1/4)



土の須恵器高环の脚部。Ⅲ B期～IV期前後か。SP010はSD02に切られる遺構。

B区は対象地の最南端である。道路面は8.85mで、GL-120cmまでは道路造成層、この下は旧水田

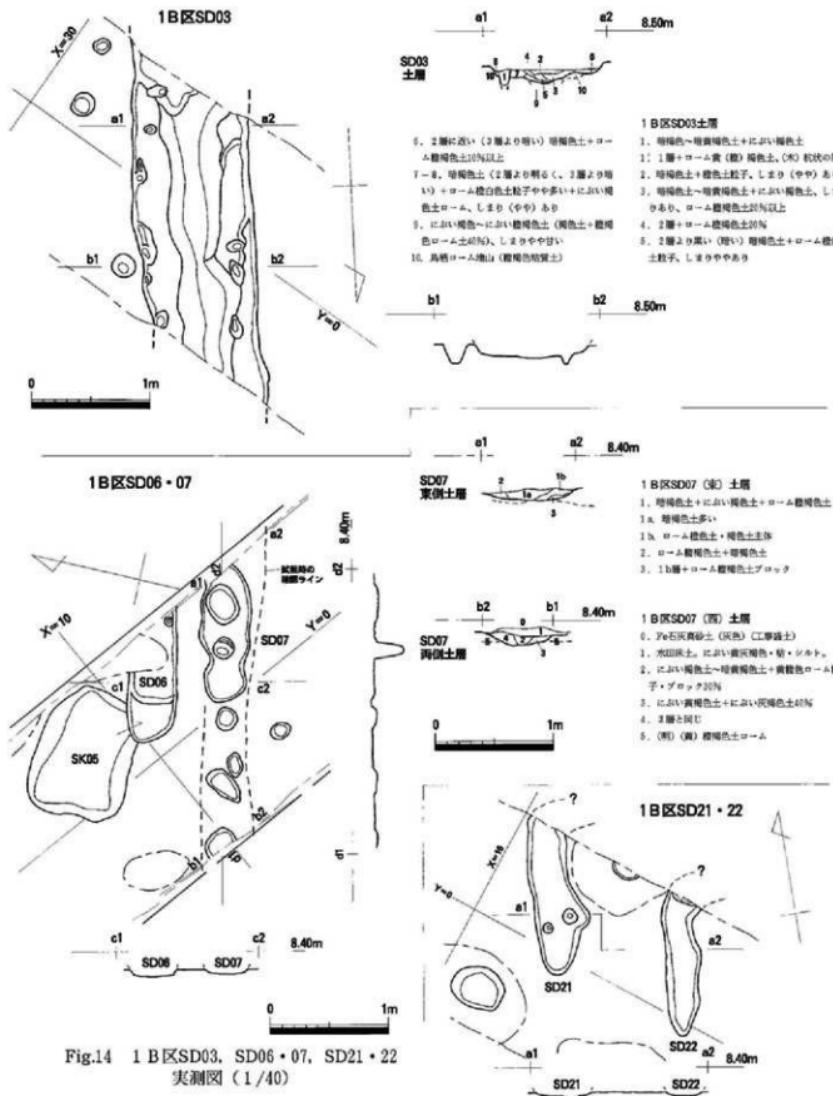


Fig.14 1B区 SD03, SD06・07, SD21+22  
実測図 (1/40)

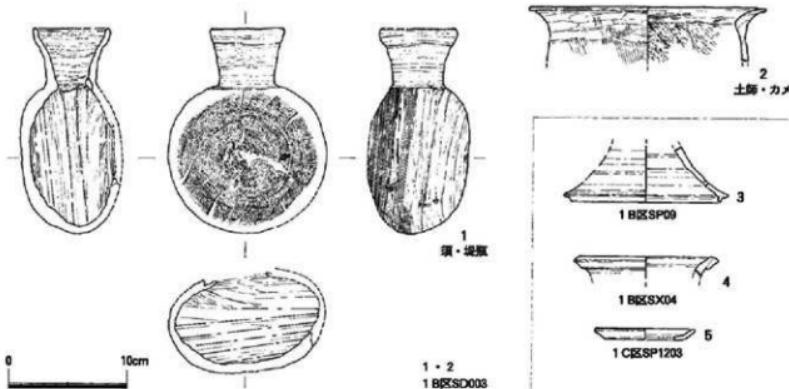


Fig.15 1 B区SD003ほか1 B・1 C区出土遺物 (1/4)

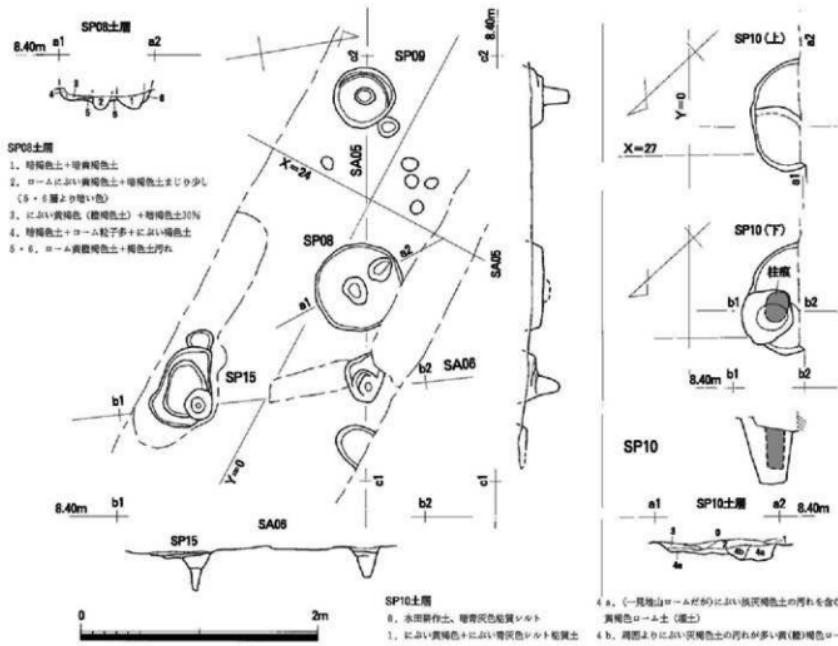


Fig.16 1 B区SP08・09・15, SP10実測図 (1/40)

層、-150cmで暗褐色粘質土層（木質片あり）、-160cmで黒色粘質泥質土層（木質片あり、有機物含有層）となり、GL-185cm前後での標高7.0m前後で八女粘土地山上面となる。遺構は検出されなかった。

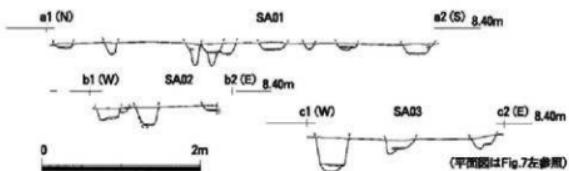


Fig.17 1C区SA01~03断面図 (1/60)

試掘調査ではピットの存在が指摘されていたが、近年の擾乱坑であった。地山直上の土層状況や地山レベルから、比較的新しい時代に段丘裾部地形をさらに平坦

に整地削平して水田化したものと考えられる。遺物の出土も全く無く、北西側のA区でも南側は造構が薄くなり、その間に遺跡の実質的な縁辺部が想定できよう。

ここで本報告における土器の編年と実年代観について触れておく。須恵器編年は、小田富士雄による大別（九州編年）を用いるが（小田1984「九州の須恵器研究序説」『九州考古学』22、小田1977「豊前地方における須恵器」『天鏡寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財研究会、など）、その様式内容ついで、II～V期は高橋徹・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題」「古代文化」42-4、IV～V期は中島恒次郎1997「七世紀の食器—九州消費地—」「古代の土器研究—律合的土器様式の西・東 5・7世紀の土器—」（以下、「中島分類（編年）」とする）を参照した。さらにはIV期は中島編年を参考にして、その1期をIV-1・2期（IV期前半）に、II期をIV-3・4期（中島編年II-1期/II-1期新相～II-2期古相）およびV期（II-2期）に細分する（久住監雄1996「出土須恵器の編年とE-2・3号墳の発掘・追跡の年代について」『羽根戸南古墳群』福岡市報

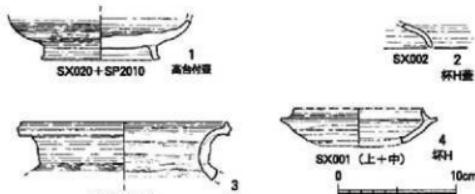


Fig.18 2A区SX001・002出土遺物 (1/4)

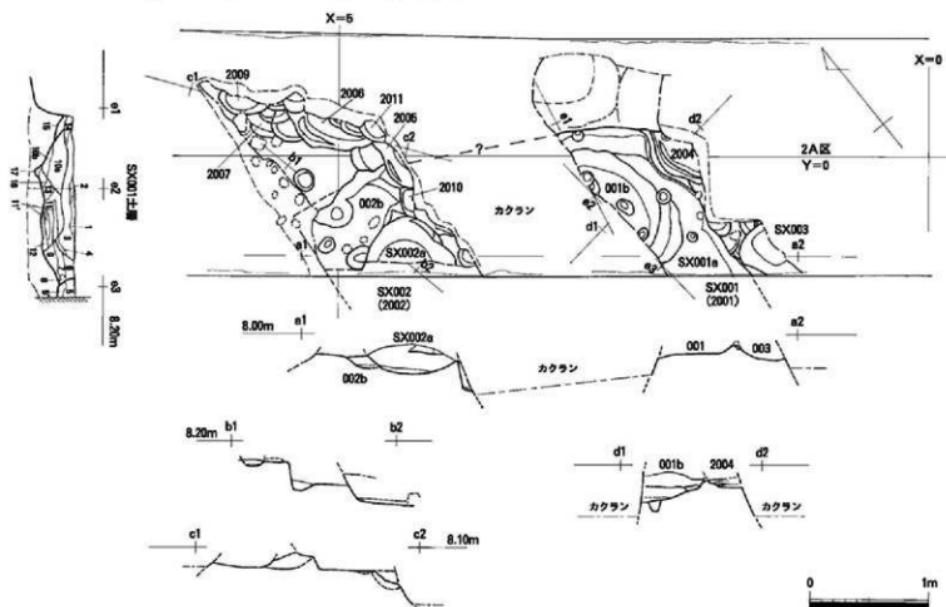


Fig.19 2A区SX001・002実測図 (1/40)

告661集)。その実年代は、IV期を590年代前半から680年代前半までとし(IV-3期は640年代前後)、V期を680年代中頃から670年代前半と考える(その根据は久住1999前掲参照)。従来の九州での編年より新しく見るが、畿内(飛鳥・難波)の土器編年の実年代観(佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、など参照)との対照では整合的である。問題となる齊明朝から天智朝(655~672年)は、おむねIV-4期からV期に相当すると推定する。従来説のIV期からV期の実年代をより古くする論者は(例えばV期を7世紀中頃あるいは第2四半期とする立場)、飛鳥や難波との編年対比を検討した上で再考すべきであろう。

### (2) 1A区 (Fig. 6・7, PL. 5-2)

1A区は、A区の北西に接する調査区で、1区南端である(Fig. 6・7)。1B区との間には既設配水管がありこの間で区切った。A区SD01の続きの溝(SD01)と土坑SK02を検出した。

1A区SD01は、A区SD01と同一であるが(Fig. 9)、土層から数度の掘り直しが推定できる(Fig. 10中段、PL. 2-1)。Fig. 12-2, 5はSD01出土。2は須恵器の蓋の底部としたが、横瓶など瓶類の一部の可能性がある(PL. 9-7, 8)。外表面はタタキ後カキメを施す。5は弥生土器で、須玖I式。本来は該期の遺構が周辺に存在した可能性がある。

SK02(Fig. 13上段、PL. 5-4)は約70×90cmの略長方形で、底面中央に径25cmの柱痕跡があり、下部は杭状に深くなる(PL. 2-8)。方位は長軸が略東西だが、東側が若干南に振れる。調査

時には「柱穴(SP)」  
としたが、下部の杭  
状になる柱痕跡や、

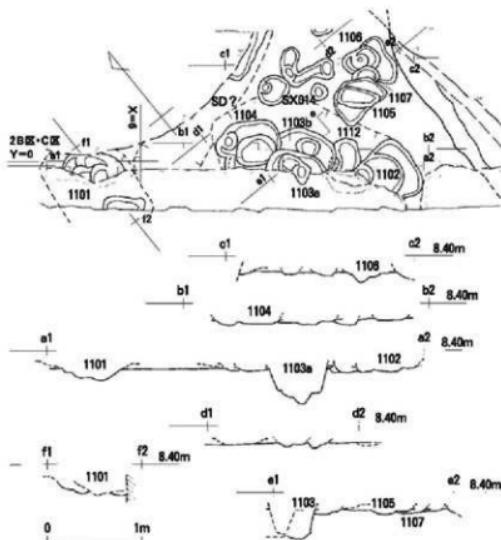


Fig.20 2B区SX014ほかビット群実測図(1/50)

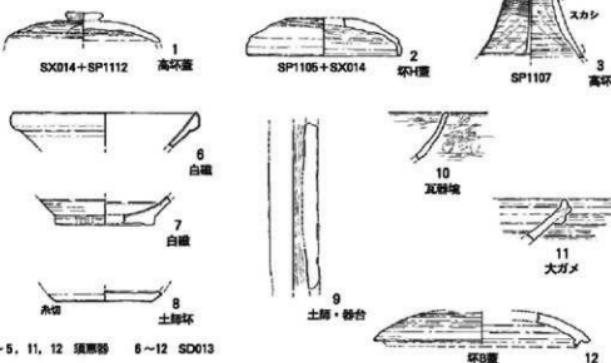


Fig.21 2B区SX014ビット群、SD013出土遺物(1/4)

段丘縁辺部での検出から、より古い時代の「落とし穴」遺構の可能性を考える。遺物が無く時期不明だが、覆土は他の溝などよりも堅くしまっていた。

### (3) 1B区 (Fig. 7)

1B区は、1区の大部分を占める49.5m長の調査区である (Fig. 7、PL. 6-1～4)。

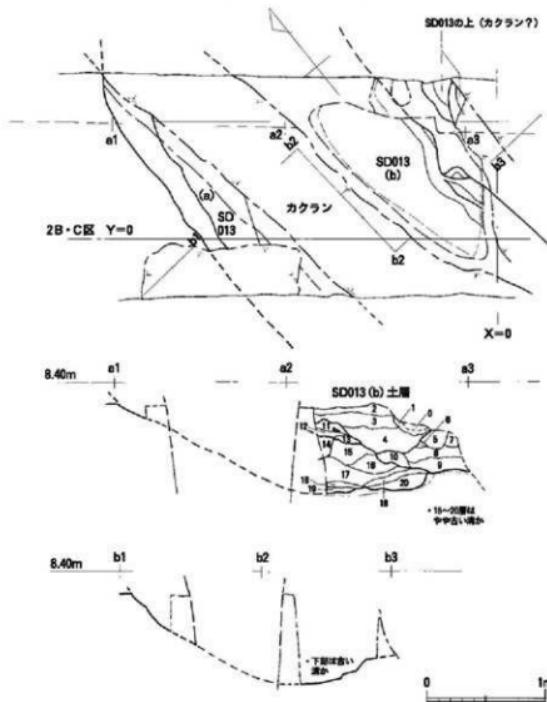


Fig. 22 2B区SD013実測図 (1/40)

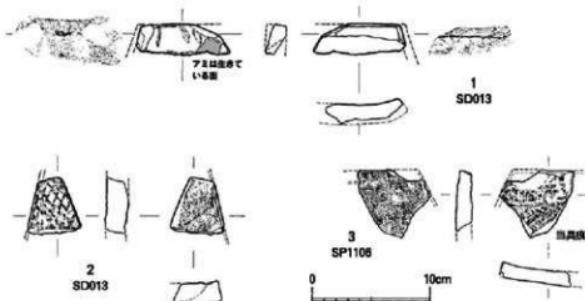


Fig. 23 2B区SD013ほか出土瓦 (1/4)

SD03は1B区北で検出した (Fig.14上段、PL. 2-4・6-5)。SD03は南北正方位に走行し、幅1.0m、深さ10～20cmの浅い溝である (検出時の予想よりもかなり浅かったため一部掘りすぎてしまい、補修して写真を撮影した)。遺存度からかなりの削平が想定される。この溝は道路を挟んだ北側の59次溝12の延長である (Fig. 3・7)。

Fig. 15-1 (PL. 8-4～7)は須恵器の提瓶で、試掘時に検出上面で出土した (Ph. 7)。把手が全く消失し、かなり小型化しており、IV期末以降V期前後の型式であろう。SD03は、今回の出土土器からV期前後の区画溝であろう。

1B区中央南側にSK05がある (Fig.13下段、PL. 2-7・5-4)。長軸が東西正方位、110×75cmの略長方

形をなす。出土遺物からは不明だが、周囲調査で正方位をなす溝や柱穴に7世紀中頃～後半のものが多く、覆土の特徴も古墳時代～奈良時代の間であろう。土坑(SK)としたが大型柱穴と考える。柱穴とすれば、土層からは

2 ATEXX001

1. 明褐色土+ローム粒子多く含む  
2. 暗褐色土+ローム粒子や少なくて含む、1層  
より黒い  
3. 「層」粒子  
4. 黒褐色の土+暗褐色粗粒土。<ローム粒子+小  
ブロック少し含む  
5. 3層+土に含む褐色地ローム小ブロック多い  
6. 明褐色 (やや黒い)+ローム層暗褐色土粒子  
や多い  
7. 暗褐色に近い褐色地土+に含む褐色地土を  
粒子少し  
8. 3層+土+黄褐色土粒子や多い  
9. 明褐色土+土粒子多い (明褐色ロームブロック  
+粒子や多い)  
10. 7層に似て少しや少ない褐色地ブロック  
(ローム粒子少)  
11. 明褐色地に似て褐色土+ (に) 褐色粗粒土  
+ローム粒子多く (約8%) 含む (斑状も含む)  
(小塊、土塊状、更に少を含む)  
12. に近い褐色地に似て褐色土+ローム粒子  
13. ややない褐色地土層などに似た褐色土  
14. 褐色地土 (大) 混合  
15. に近い層に似て黄褐色 (に似た) 褐色土+ロ  
ーム層暗褐色土粒子+ブロック約15%+暗褐色土  
+ミナリ層約25% (見) (見褐色土)  
16. ロームに平行してに近い層に似てに似た褐色地  
17. 明褐色に似て褐色地土層と褐色地ローム粒子  
+小ブロック多く含む (見褐色土)  
18. に似た褐色地土 (に似た) 褐色地土+ローム  
粒子+小ブロックや多い  
19. 10.層に似て (見) 褐色地土ブロックはなし、に  
似た褐色地土に似た褐色土 (少)  
20. 12層に似る  
21. 暗褐色土 (旋流土) +土層+小ブロック少  
2 B区SC019土壤  
0. 1層+砂少、酸化状況多い  
1. 剛 (周辺) 土褐色シルト+砂、砂粘  
2. に似た灰褐色シルト (土や砂)、砂、砂粘 (見)

しへ若干) またも

3. 雜草-暗褐色系 (黒葉) シルト、砂・粗砂を少し含む、土壌わずかに含む

4. 雜草-暗褐色或灰褐色質地 (板質土) + 砂や砂をわずかに、土壌わずか、或成むわずかに含む、しまさう

5. 粗砂多く含む、砂まじり、細かいにい砂灰 (灰褐色) 色 (やや黒葉) シルト

6. ルノリカムや粗砂や少ないと

7. 雄蕊花被合の暗褐色シルト。ローム粒子含む  
8. 雄蕊花被合の暗褐色 (暗褐色或灰褐色) 粒状土、  
粗砂を含む (よく粗砂)。ローム粒子が少ず  
9. 雄蕊花被合暗褐色土 (より堅性、堅い)。  
ローム粒子・アーバコラウムか、或化成性  
10. 雄蕊花被合暗褐色或灰褐色質地 (粗砂・砂タリ  
40%、ローム粒子・小アーバコラウム少し含む、  
粗化成性・マンジン花被あり)

11. 淡褐色-灰白色粗砂+灰褐色底質レット約40%  
~71%

12. にい葉-暗褐色或灰褐色 (やや黒葉) + 灰白色粗砂20%+無機質・マンジン花被

13. (黒) 黒叶 (黒葉) 暗褐色或灰褐色シルト+灰白色  
粗砂少々、粗砂化・マンジン花被

14. 墓場土-暗褐色粗砂粘土、氧化鐵・マンジン花  
被、暗褐色の土 (やや青褐色)

15. 17cm深さ無じまじ灰褐色 (板質) ブロック  
25%

16. ローム層にない粗砂土、雄蕊花被粘土 (粗  
質シルト) 40%

17. (12>13>14>15>16 在の葉は都々枯れ、  
12>13>14>15>16 在の葉は都々病葉)

表1. 2A区SX001, 2B区SD013 土层注记

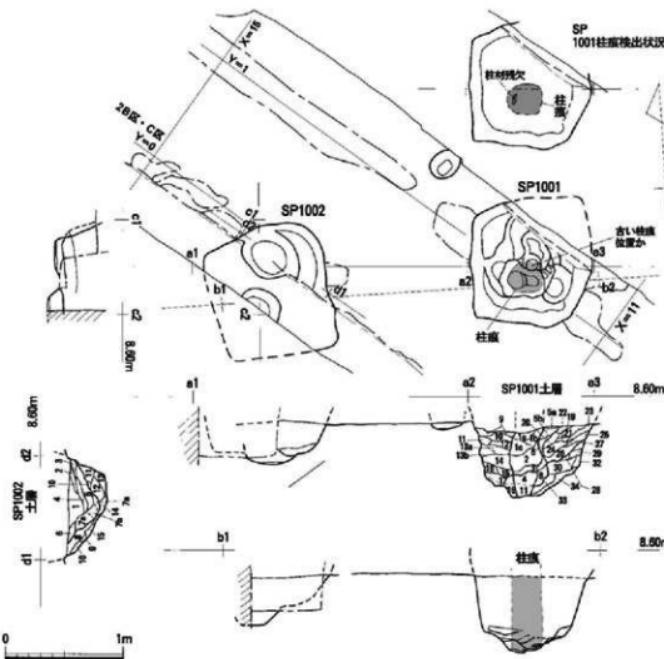


Fig.24 2 C区SP1001・1002 (SB01) 実測図 (1/40)

柱は抜かれたものと考えられる。大型建物や区画施設の一部であろう。

SD07 (Fig.14左下、PL.2-3・6-6) は、試掘時には一本の溝であったが、きわめて浅く、本調査時には地山上面を少し削ってしまい、ピットが断続するような状況になってしまった。この状況からは布堀溝であった可能性もある。N-78°-Eであり、SD01・02に近い。SD21・22 (Fig.14右下) は並列する小溝で、およそ南北正方位である。北側は東に屈曲する可能性がある。きわめて浅く、時期は不明。SP08 (Fig.15左、PL.2-5) はSP09などとともに柵列をなす可能性がある (SA05)。N-80°-Wの方位。その他、SP10 (Fig.16右、PL.2-6) やSP15 (Fig.16左) など、径10~60cmの中のピットないし柱穴があるが、著しい削平のために、浅い遺存度しかない。ピットも略東西方向の並びが想定できるものあり (SA04など)、柵列や建物の一部をなす柱穴があると考えられる。

Fig.15-3 は赤焼土器 (赤焼須恵器) の高坏脚部 (SP09出土)。薄い作りで、楕円端部は内側にはね上げる。八女窯跡群産のものに類似する。2 C 区 SD004 にほぼ同じものがあり、IV期後半。SA05の時期を示すか。4 は須恵器の壺ないし瓶類の口縁部。近世以降の掘り込み (SX04) の出土。

#### (4) 1 C 区 (Fig. 7 左、PL. 5-6)

1 C 区は 1 B 区の北西端に続き、現道路を南北に横断する区間の南半である。径15~40cmの小柱穴群を検出した。暗褐色 (~黒褐色) 土の覆土のものが多く、遺物は僅かであるが古代前後が主体か。柱穴列があり、柵列を推定できる (SA01・02・03) (Fig.17)。SA01のうち SP1203 から土師器小皿が出土した。ヘラ切り底であり、10~12世紀前半か。一部ピットは古代末期~中世前期に下るのだろう。

#### (5) 2 A・B 区 (Fig. 8)

2 区は、大同青果 (株) の敷地南端の交差点から約45m北西までの範囲である。

2 A 区は道路交差点にかかる部分である。GL-60~65cmの標高8.0m前後で地山上面となるが、調査区は顯著な攪乱が多く占められ、その間に 2カ所の遺構残存範囲が島状に残る状況であった (Fig.19, PL.7-2)。遺構はいずれも端が攪乱で破壊されその全体像が不明であるが、幅1.3mの攪乱溝を間に挟んだ東側の SX001 (PL.2-9) と西側の SX002 は、本来は同一の大型土坑または竪穴住居掘方の可能性がある。出土土器から 7世紀前後の遺構であろう。SX001は東側が凹み、この部分を SX001 b としたが、土層からは同一遺構と判断した。一方、東側 SX002 a は 002 b を上から切り、大型

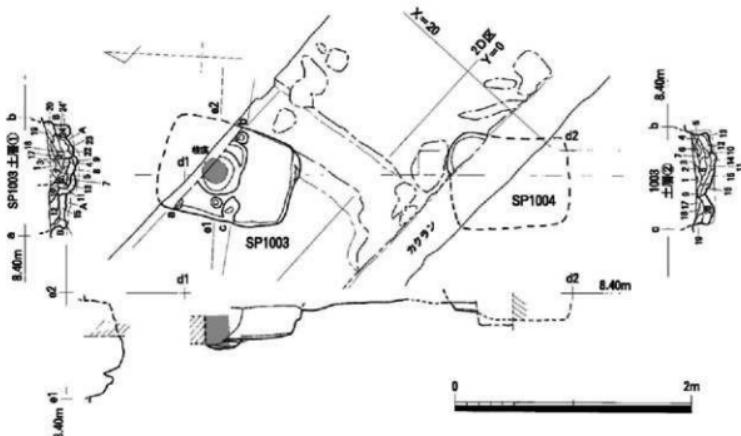


Fig.25 2 D区SP1003・1004 (SB02?) 実測図 (1/40)

柱穴の一部であろう。2 A区は他にも土坑・柱穴が重複しており、本来は造構が集中する範囲であったようである。

Fig.18はいずれも須恵器。1はSP010とSX002の破片が接合した。高台付長頸壺である(PL. 8-3)。高台の作りはVI期の环Bに類似する(SP010はSX002下部突出のビットだが切合関係は微妙である)。2は环Hの蓋で、IV期後半。4は环Hの身。底部はケズリがあるが径が小さく、IV-2期には下る。3の須恵器甕はIV期の幅内であろう。他にSX001検出時に鉄滓が1点出土した。

2 B・C区は、2 A区西側の搅乱(近代までの水路の埋め立てか)を挟んで北西に続く調査区で、およそ17.5m長の範囲である。この間に径5m前後の豊坑状の搅乱があり(SD013を切る水道管とともに52次調査終了以後の工事によるものらしい)、これより南東を2 B区、北西を2 C区としたが、同時に調査を行っている。

2 B区では、円形搅乱と東側のSD013の間に、幅2.4mの範囲に柱穴とは異なるきわめて浅い小穴状の密集凹凸面(これを覆う包含層をSX014とする)を検出した。SX014は粗砂を含む褐色の特異な覆土であった。凹凸面は状況から古代道路の路面にみられる「波板状造構」の可能性も考えたが、52・37次の

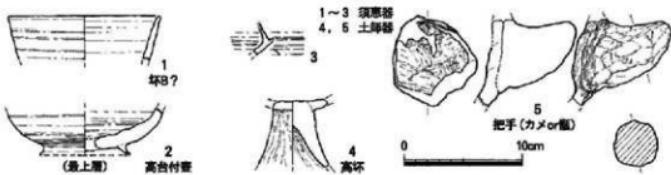
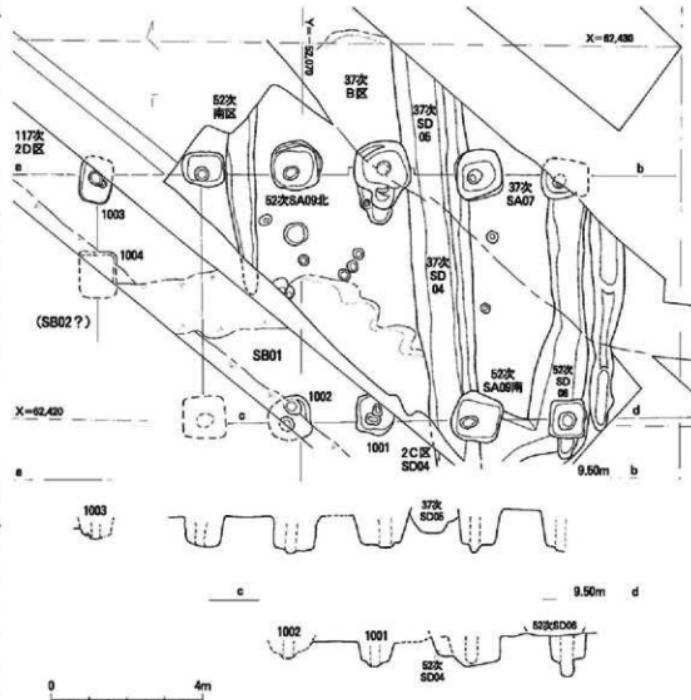


Fig.26 2 C区SP1001出土遺物 (1/4)



検出面よりも低くなっている、中世水路に伴う耕作地（水田）の造成掘削面あるいは耕作痕跡と考えられる。砂混じり層の上は暗褐色土シルトの包含層であったが（遺跡の層序の項参照）、これは旧耕作土層であろう。北側隣地52次の南東端に南側への落込みがあるが（Fig. 5）、これはSX014の造成範囲の端

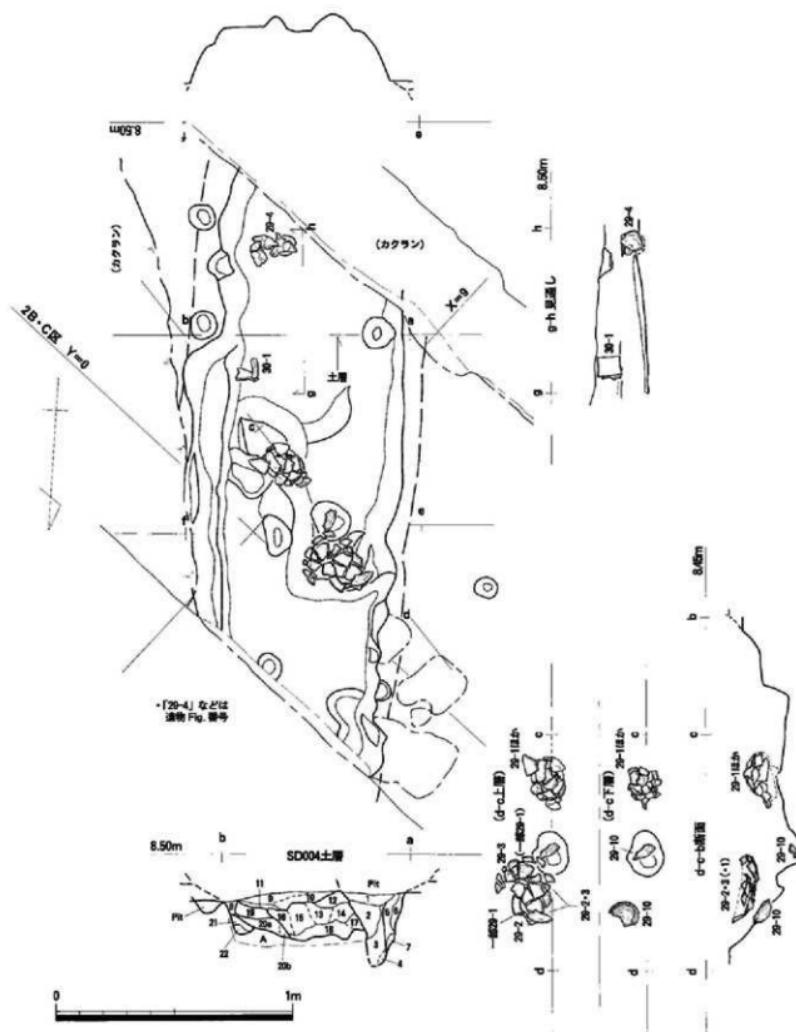


Fig.28 2C区SD004実測図 (1/20)

を示す可能性がある。7世紀代の出土土器が多いが、二次的流入であろう。試掘時には、SX004の西側端に略東西（N-67°-E）の溝状プランを検出したが、本調査時には地山上面を少し削ってしまい、非常に浅い遺構であったために、ごく一部の遺存になってしまった。SX014に伴うものであろう。その他、SP1101・SP1103はSX014下部の他の凹みよりも明瞭な掘り込みがあり、比較的大型の柱穴である可能性がある。

2区南側には落ち込みSD013があり、深さ75cmの遺存である（Fig.22、PL.2-10・6-7）。中世前期の遺物が含まれ、砂を含む土層からは水路と判断される。南東側は2A区からの攪乱があり幅が不明である。しかし、近年までの水路（大同青果の敷地東側の南北道路西側に平行して近代まで存在）と平行しつつ近代水路に切られて重複し、その初現となる溝であろう。土層断面を見ると北西側により古い落込みがあり、この幅の部分が最初の溝の範囲であったとも考えられる。およそ南北方向の溝だが、北側の37次では検出されていない。調査区北辺外で東側に蛇行するともみられる。

Fig.21-1～3, 5はSX014とその下部の凹み（小坑SP1104・1105・1107・1112）の出土。1～3はIV期前半、5はVI期新相。4は小型高環で3方向の透孔だが、透孔が貫通しない（PL.9-9, 10）。IV期新相以降に下る。6～12はSD013出土。6～10は12世紀前後の遺物。9は高環状で細長い脚柱状部の器台。11はIV期、12はVI期の須恵器である。他にSP1104から鉄滓が1点出土した。

Fig.23はいずれも平瓦。1は凸面側の表面は一部のみ残る（PL.9-5, 6）。凹面はナテ消し。丁寧

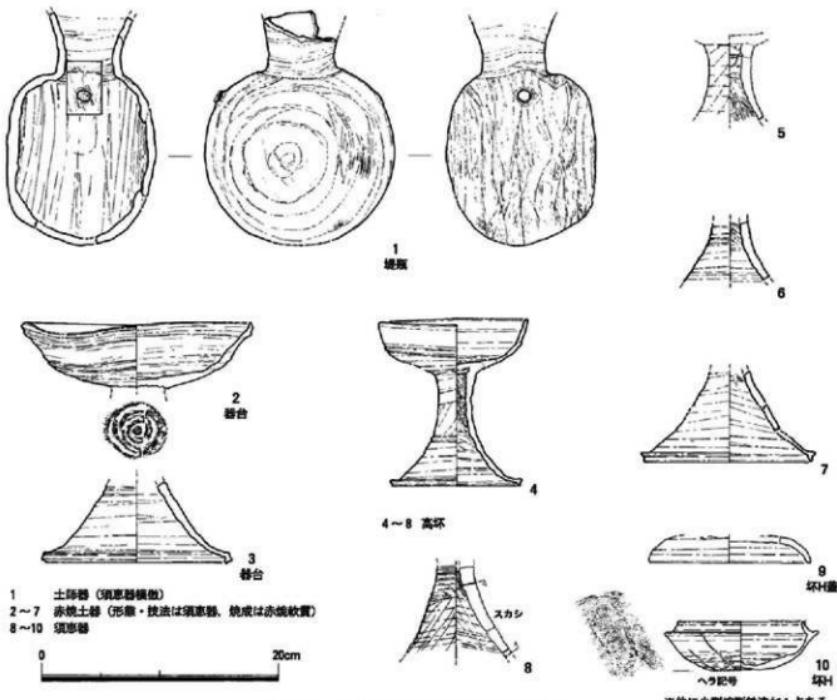


Fig.29 2C区SD004出土遺物（1/4）

※他に小型壺型鉄滓が1点ある。

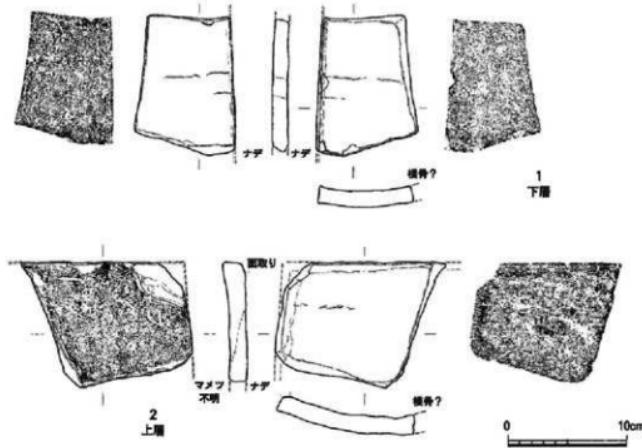


Fig.30 2 C区SD004出土瓦 (1/4)

SB01-SP1001 土管



18. (高麗一色) 高麗色土+高麗色土ロール小ブロック  
15kg



### 1~3. 墓園地主三体

1. 地域別・業種別に、(一)、(二)、(三)の順位で上位10社を示す。  
2. 1箇所・ローム・モービルセブン・プロト 30%  
3. 地域別に、鹿児島県地圖と、鹿児島県土地・計画課  
4. 1箇所・やや中央地図と、鹿児島県地圖・ローム・モービルセブン・プロト 15%  
5. 鹿児島市地圖と、鹿児島市地圖・ローム・モービルセブン・プロト少しだけ  
6. 鹿児島市地圖と、鹿児島市地圖・ローム・モービルセブン・プロト少しだけ  
7. (ヤマハ・ヨシヅミ) (吉野) 沖縄地図・ローム・モービルセブン  
8. 7. (ヤマハ・ヨシヅミ) (吉野)  
9. にいにわ地図・鹿児島県地圖の合算 (1~7より多い)  
10. カシマ・モービルセブン・ローム・モービルセブン、鹿児島 (鹿児島) の西側  
11. 9. モービル・鹿児島地図・山口にない鹿児島地図は15%

15. 黄褐色土・に赤い黄褐色土混含+褐褐色土汚れ5% 16. に赤い(強)褐色土(やや淡く褐色気味)+に赤



5. 賴昌星、李學勤。



表2. 2C·D区SP1001·1002·1003, SD004, 3A区SD003·SX006

土層注記

桶巻取り後に整形行為として再度タタキを施すもの。IV期～V期の牛頭窓跡群や那珂道跡群の平瓦の一部によくみられる。3は凸面のみ灰白色で、他はにぶい黄橙色である。

#### (6) 2 C・D区 (Fig. 8)

2 C区では、SD004とSP1001・1002を検出した (PL. 1-1)。

SP1001・1002はいずれも略方形の大型柱穴であり (Fig.24、PL. 1-4)、いずれも柱痕がある。

SP1002 (PL. 2-13) は擾乱により遺存が良好ではないが、SP1001は110×100cmを測る平面規模で、柱痕跡は径30cm前後である (PL. 2-12)。柱材の一部が遺存していた。この2柱穴ともにより古い柱の圧痕である底面の凹みがあり、一度建替があった可能性が高い。両柱穴は、東側の52次で検出した正東西方位のSA09 (二重柵列とされる) の南側列の延長線上にあり、同一造構 (官衙的区画の柵列ないし大型建物) の一部である (Fig.27)。37・52

次の成果から、南北梁間は色々6.5mにおよぶが、この間の浅い東柱柱穴が削平されたと考え、大型建物として認識する (SB01とする)。なお、回廊状の二重柵列としても、柱間が広すぎるという問題は変わらない。



Fig.26はSP1001出土土器。1は徑復元が微妙だが环Bの可能性がある。2は高台付壺。底部付近にカキメ。高台のあり方からVI期か。上面出土。1・2が建物の下限（VI期）となる。3は环Hだが、IV期新相か。4の土師器高环脚部はIV-4期を下限とする（中島分類の高环1）。3・4の時期は52次SA09の出土土器と同じで、建物の上限（IV期新相）である。SB01は、7世紀中頃～後半と推定する。

2D区は、2C区とは近年の水道埋設の攪乱を挟んで北西に続く約16.5m長の調査区である（PL. 1-3・7-5）。調査区南側でSP1003とSP1004を検出した（Fig.25）。SP1003は約110×80cmの略長方形の大型柱穴で、柱痕跡も認められた（PL. 3-1, 2）。52次SA09の北側柱穴列の延長線上にあり、前述のSB01と同一遺構の一部である可能性もあるが、SP1003が南北にやや長い長方形であり（SB01の柱穴は正方形）、南に続くSP1004との柱間はSB01（SA09）の柱間の1/2にも1/3にも相当せず、異なる柱間規格であり別棟であろう。一案であるが、37・51次の柱穴列と2C区SP1001・1002によるSB01を東西棟（正殿？）とし、SP1003・1004はその西に接する南北棟（脇殿？）（SB02）の一部である可能性を考える（Fig.42）。SP1004は、攪乱により破壊され僅かな遺存だが、位置的にSB01（SA09）の北側柱穴列の延長上のSP1003から南側へ直角に折り返した位置にあり、SB02の一部であろう。

2C区SD004は、ほぼ南北正方位の溝で、幅80～90cm、深さ25cm前後、断面逆台形である（Fig.28、PL. 2-11）。52次SD04と37次SD05の続きであるが（Fig.5）、より削平されて遺存度が悪い。上層で土器が一括して出土したが（PL. 7-3）、これらは赤焼土器高环（須恵器と同型）の型式から7世紀前半～中頃（IV-3期か）と考えられる。なお「上層」といっても、本来の溝の深さからみれば下層に相当し、本調査区の最下層出土土器群（PL. 7-3）とのレベル差あるいは時期差はわずかであろう。

同一溝である37次SD05と51次SD04からは7世紀初頭～前半（IV期前半）の土器も出土するが、IV期後半まで最下部まで断続的な掘り直しがなされた可能性がある。あるいは、北がやや西に振れるIV期前半の溝と真南北のIV期後半の溝が重複する可能性もあり、周辺での検証が必要である。

Fig.29 1は須恵器提瓶を模倣した土師器である（PL. 4-1～3）。把手はボタン状の痕跡器官となっている。2～7は須恵器と同じ作りだが土師質（軟質）焼成の赤焼土器。2～4, 7は薄手の作りで、特に2, 3, 7の口縁部や脚縁部の端部の特徴からは八女窯跡群産を含む可能性がある（PL. 4-7, 8, 12）。4の高环（中島分類の高环V2）の形態はIV-3期の須恵器に類似例がある（PL. 3-10）。また2・4は焼き歪みがあり、特に2は顯著に歪んでいる。8の高环脚部透孔は2方向か。9の杯口の蓋

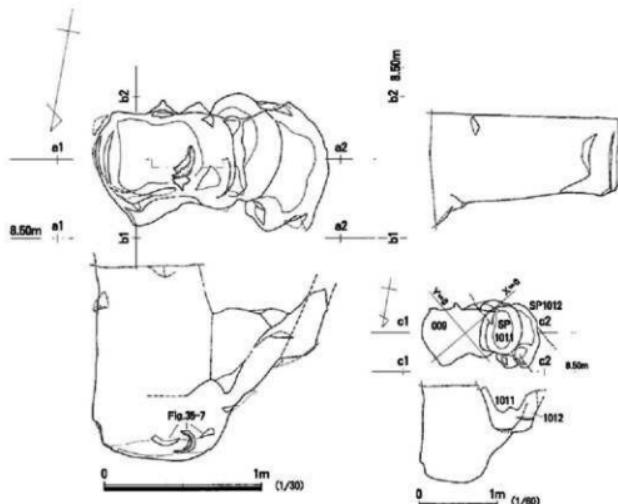


Fig.33 3 A区SX009（井戸？）実測図（1/30, 1/60）

は、径復元が微妙だが、図の通りならIV期前半となる。しかし底面で出土した10の杯口の身は、その上に載る杯蓋径は12.0cm前後であり、IV-3期に下るだろう(PL.4-4, 5)。

Fig.30はSD004出土の平瓦。1(PL.10-5, 6)の縁部は切り放しのまま。両面ナテ仕上げ、摩滅もあり不明瞭だが凸面にはかすかにタキ痕がある。粘土紐積上げ痕跡があり、凹面の状況は桶巻作りの模骨成形とみられる。灰白色を呈する。2(PL.3-13, 14)は縁部の凹面側を面取りする。粘土板(帶)痕跡がある。凹面は摩滅するが、当具とみられる凹凸の痕跡がかすかに残り二次整形がなされたか。凸面も摩滅し不明瞭

だがタキ痕を板ナテで消したらしい。ここまで他の瓦は、やや軟質の還元炎焼成(瓦質焼成)であったが、2は酸化炎軟質(土師質)焼成であり、橙色を呈する。2C区SD004や2B区SD013からはIV~VI期の瓦が出土したが、SB01や、先行するSD004に伴うであろう未発見の建物には、少ながらも一部に瓦を使用していたのではないかだろうか。

また、SP1110からは黒色土器が出土し(Fig.31-3)、古代末期の造構の展開も考えられる。

#### (7) 3 A・B区 (Fig.8)

3区は今回の調査区の最も北西側で、東側に隣接する



Fig.34 3 A区SX008ほか実測図 (1/50)

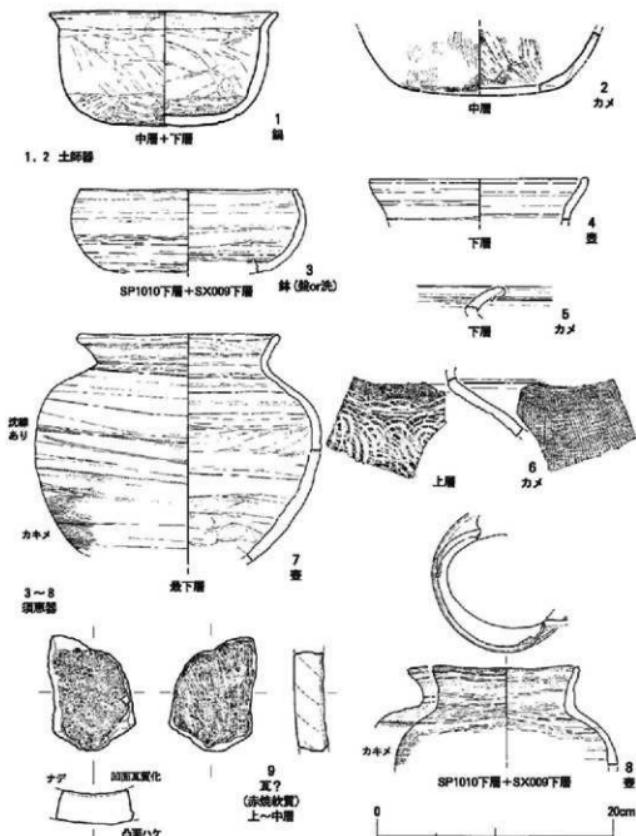


Fig.35 3 A区SX009・SP1010出土遺物 (1/4)

大同青果（株）の事務所棟の前面にあたる。

3 A区は3区の南東部で、2 D区から5.7m離れて設定した13m長の調査区である (Fig. 8、PL. 1-2)。調査区南東部で溝や土坑・柱穴をやまとまって検出したが、中央から北西側には遺構がほとんど無かった。SD003はほぼ東西正方位の溝で、幅60cm、深さ10~20cm前後、断面は箱形ないし逆台形である (Fig.32、PL. 3-4)。西側で途切れるように見えるが、やや中心軸が南に振れる掘り込みがあり (SD003 b)、調査区西壁際に続く溝の断面が認められる (Fig.32—土層d 1-d 2 の1~3層)。浅くなつた部分が削平されたか、同一溝が一定の埋没の後に東側のみ最下部まで再掘削されたものと考えられる (SD003 a)。SD003bは土坑SX006の覆土上層を切る (PL. 3-3)。遺物は少ないが、溝の掘削時期は7世紀代であろう。この溝の延長は隣接調査では検出されていない (37次B区では複数部分)。

SX006は搅乱溝を挟んだSX1017と同一の可能性があり (Fig.32)、とすればこれもSD003とほぼ重複する掘り直し前の溝とも考えられる。さらに、SD003 aをまたぐ位置に小規模な掘立柱建物SB03・04が推定できる (Fig.32)。SD003に伴う門柱状遺構の可能性がある。SB04→SB03と変遷する。

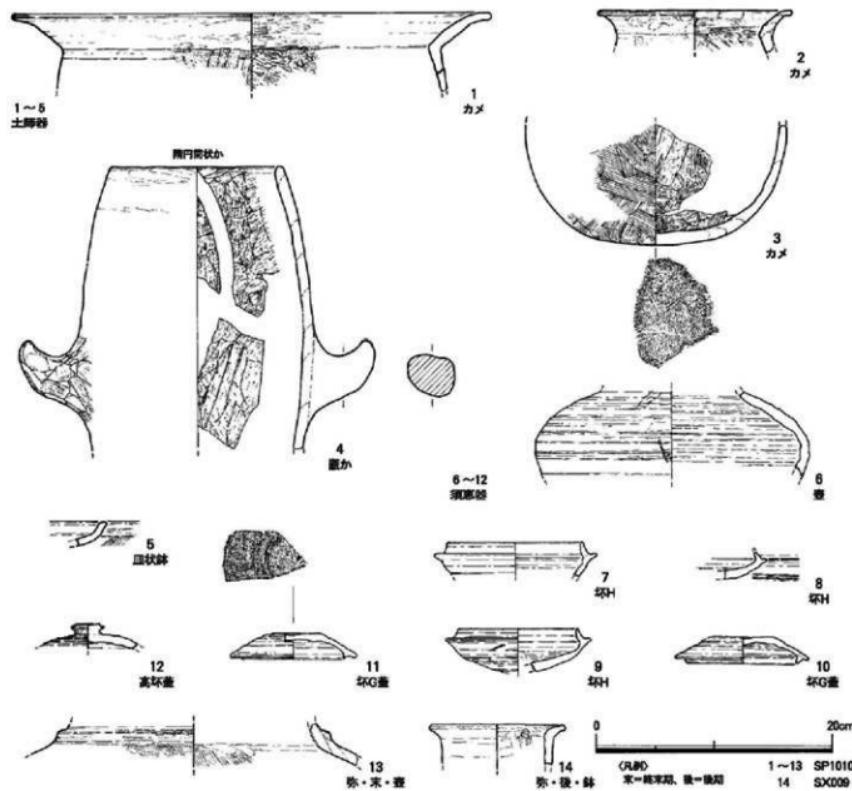


Fig.36 3 A区SP1010 (SX009上部) 出土遺物 (1/4)

Fig.31-1・2はSD003出土で、1は环日の身でIV期前半、2はVII期の杯蓋で8世紀初頭～前半に下る。土層や溝の平面プランから掘り直しが推定され、溝の上限はIV期、下限がVII期となろう。

SD003の南側で、重複する径60cm前後のやや大型の柱穴を検出した(SP1011、SP1012)(PL.7-6)。建物の一部と思われるが、その主要部分は調査区外となる。

SX009はこれらに重複し、より古い。はじめ大型の柱穴と認識したが(上層途中まではSP1010とした)、掘り進めると長軸120cm×幅60cm前後、深さ135cmの階段状掘り方の土坑となつた(PL.1-5)。底面で若干の湧水があり、最下層に完形に近い土器が廃棄されていたことから井戸の可能性が高いが(PL.7-7)、掘方の特徴から「大柱」を引き抜いた土坑の可能性もある。長軸は略東西方位だが東側が若干北に振れる。土坑の時期は出土土器(Fig.35・36)から7世紀第3四半期(V期)前後であり、東西溝SD003と共に存する。

Fig.35は主に中層以下の出土。1は甕というよりは形態的に「鍋」である(PL.4-11)。煤・コゲの痕跡がある。2も外面に煤痕跡がある。3は盤あるいは洗としての鉄鉢形土器(中島分類の「鉢III」)で、IV-4期～V期(中島編年II-2期)頃を初現とする。7の壺は灰白色でやや軟質気味焼成、焼き歪みがある(PL.4-9,10)。外面は中位まで回転ナデ、下部は細かいカキメ。中位に雜なラセン状沈線がある。

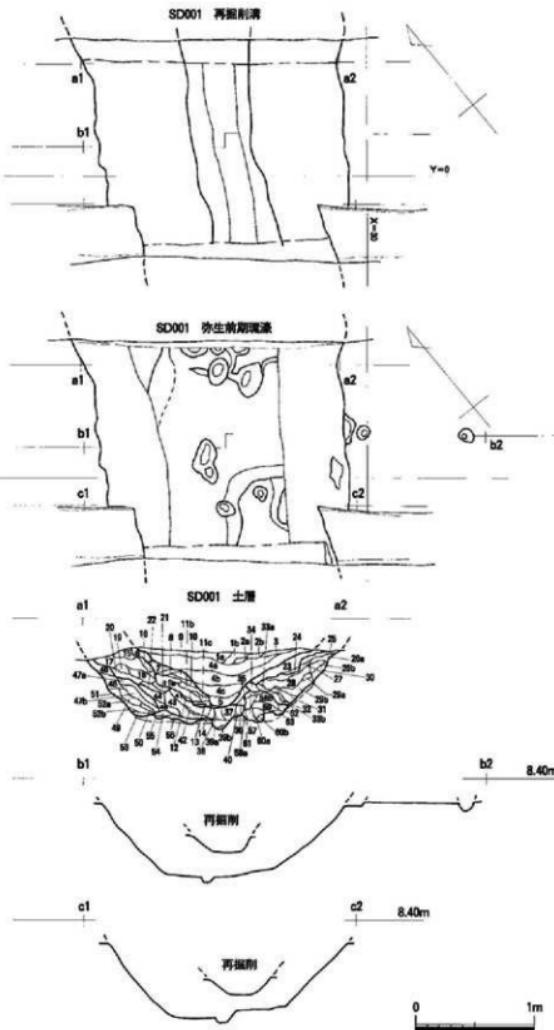


Fig.37 3B区SD001(弥生前期環濠)実測図(1/40)

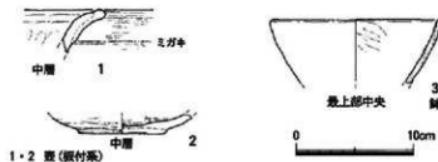


Fig.38 3 B区SD001 (弥生前期環濠) 出土遺物 (1/4)

可能性もある。瓦とすれば、土器的成形を行う「神の前タイプ」段階(IV期前半)のものか。

Fig.36は主に上層(SP1010)出土。1～3は土器の甕で、大・中・小の法量分化がある。1は煤痕跡がある。4は甕と思われ(PL.10-9)、径復元すると細長い形態となつたが、橢円筒状の可能性がある。6の須恵器甕は内外回転ナデで仕上げる。5の土器鉢は中島分類の皿IIでありVI期古相からとされ、那珂115次SK050(V期～VI期初頭)の例があり、SX009の埋没の下限を示すか。7～9の

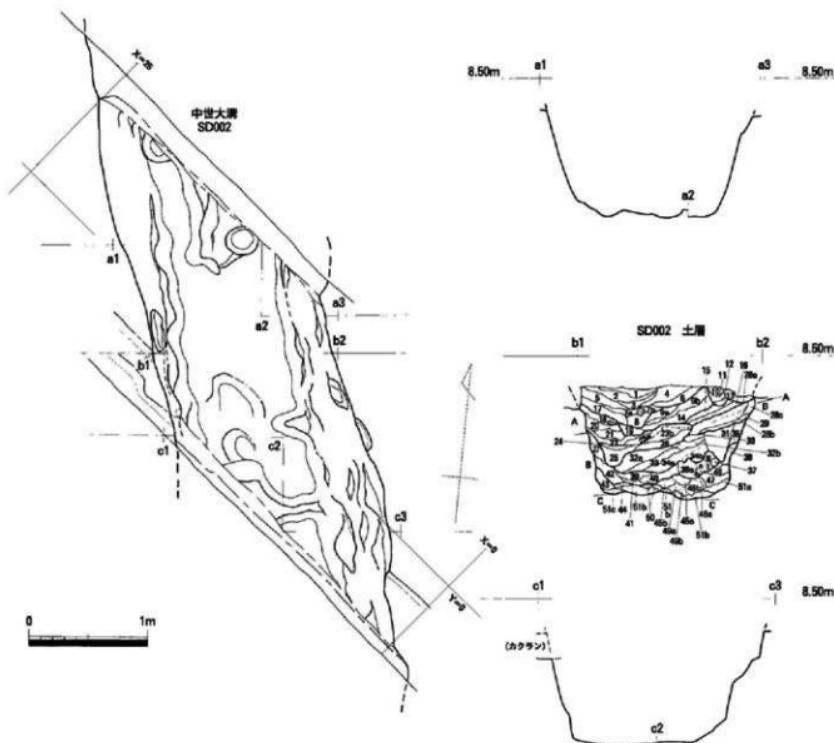




Fig.40 3B区SD002出土遺物 (1/4)

3 日本SDI001 (生産地未定) 土壌  
1. -5. 草原地帯(原野) (A) 10% → 4.-6. 23%  
3. 34% → 37% → 38% → 39% → 35% → 32% D 3%  
その他の E 3%

3. a. 稲作・園芸地帯上・山へ (栽培地) 種子 10%、一  
年草 10%、多年草 10% (栽培地)  
b. 畜牧地帯 (山地) 種子 5%、一年草 5%、  
多年草 5%、土壌に落葉 5%  
c. (くじらぐや) 森へ 稲作地帯上・黒雲・一年草  
種子 20%  
3. b. 糜糊地帯 TD101 → ムクダヒゲ毛毛虫 15% + (やさか) 15%  
d. (くじらぐや) 鹿毛地帯土・ヨモギ地帯土 10%  
e. (くじらぐや) 鹿毛地帯土・ヨモギ地帯土 10%  
f. (くじらぐや) 鹿毛地帯土・ヨモギ地帯土 10%  
g. (くじらぐや) 鹿毛地帯土・ヨモギ地帯土 10%  
h. 4. a. 4. とある場所を知らない。ヨモギ地帯や山林  
など (15%)、4. 4. やうやかの中  
c. 5. 5. とある場所を知らない。ヨモギ地帯や山林  
など (15%)、5. 5. とある場所を  
知らない (15%)  
d. 6. 6. とある場所を知らない。ヨモギ地帯や山林  
など (15%)、6. 6. とある場所を  
知らない (15%)  
e. 7. 7. 稲作地帯 (やや高い) 黄緑 + 墓地色土ブロック・植  
物地帯 (15%)  
f. 8. 稲作地帯、ヨモギ子少年 (5%)  
g. 9. に高い位置上へに高い位置上へヨモギ・植  
物地帯 (5%)  
h. 10. 10. 稲作地帯 (やや高い) 黄緑 (稲作地帯)  
i. 11. 11. 稲作地帯 (一部高處) + 黄白地帯山地土  
4. 稲作地帯 (15%)  
j. 12. 12. 稲作地帯 (高處) (葉巻上) + (葉巻) 黄緑 +  
ヨモギ・ヨモギ土・植子少年 (15%)  
k. 13. 13. 稲作地帯 (高處) (葉巻上) + (葉巻) 黄緑 +  
ヨモギ・ヨモギ土・植子少年 (15%)  
l. 14. 14. に高い位置上へヨモギ・植  
物地帯 (15%)  
m. 15. 15. に高い位置上へヨモギ・植  
物地帯 (15%)  
n. 16. 16. (山) (やや高い) 黄緑 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
o. 17. 17. (山) (やや高い) 黄緑 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
p. 18. 18. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
q. 19. 19. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
r. 20. 20. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
s. 21. 21. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
t. 22. 22. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
u. 23. 23. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
v. 24. 24. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
w. 25. 25. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
x. 26. 26. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
y. 27. 27. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)  
z. 28. 28. 明るい黄色地帯 + (山) (やや高い) 黄緑  
+ 黄緑 (15%)

表3. 3B区SD001·SD002 土属注记

壺Hの身は径が小さく(上に載る杯蓋の径は7が12.6cm、9が11.6cm)、IV期新相～V期である。10・11は壺Gの蓋で、つまみが無い。V期ないしVI-1期古相。12の高環蓋はつまみの形態が特異であり(PL.10-11)、八女窯跡群産か。13は弥生時代終末の壺(複合口縁か)の頸部。14は弥生時代後期前半の鉢であろう。

3 A区中央では、柱穴ないし土坑を2基検出した(SX008a・b)(Fig.34)。不明瞭な覆土であり、時期・性格ともに不明である。

3 B区は、3区の中央で設定した14m長の調査区である。遺構検出面は、南東側では鳥栖ロームだが、北西側は下位の地山である八女粘土が同レベルで検出され、北西側がより顕著に削平されている。

3 B区北西側では、調査区に直交するSD01を検出した(PL.8-1)。

これは隣接する37・52次調査で検出された弥生時代初頭の二重環濠のうち外側環濠の延長である。幅2.0～2.3m、深さ50～60cmが遺存し、断面逆台形である。より良好な遺存であった東側の37次では、場所によっては幅3.0m、深さ2.0mがあったが、これに比べて著しく削平されている。また37次では断面V字形の箇所が多いが、117次ではやや異なる。遺物は前期初頭の弥生土器が出土したが、少量であった。断面の土層観察から(PL.3-3)、少なくとも2回の大きな掘り返しがあった可能性がある。特に中央の掘り直しは溝を一定程度まで掘削したところで平面的に確認し(Fig.37上段、PL.7-8)、これを記録した。出土遺物は全てこの層群から出土した。37・52次では同様な再掘削層が必ずしも認められないが、環濠の埋没過程や維持管理のありかたが場所により異なっていたことを示すものだろう。

Fig.38-1は貼付口縁の壺。2は貼付平底の壺。いずれも板付系で、板付I式。3は小片で径復元は微妙だが、鉢である。外傾接合の板付系。37次では夜日IIa式期(刻目突帯文単純期)に環濠が掘削されたと報告されている。今回の出土土器は再掘削層の出土であり、必ずしも矛盾しない。

3 B区南東側では、幅1.5～1.8m、深さ90～100cmを測る断面逆台形の溝SD02を検出した(Fig.39、PL.8-2)。略南北方位だが北側が西に振れており、51次調査のSD03に統くものである。遺物は少ないが、時期は中世である。土層観察から、人為的な埋め戻しと複数回の掘り返しの反復があった可能性がある(Fig.39右、PL.3-6)。Fig.40-1は滑石製鏡(PL.9-16、17)。内外面は煤やコゲが付着する。2は白磁碗(V類か)。3・4は土師器の小皿・壺で、いずれも系切底で12世紀中頃以降である。

#### (8) 3 C区 (Fig.8、Ph.8)

3 C区は、3 B区から4.5m北西側に離れて設定した調査区である。標高8.1～8.2mで八女粘土上面となる。試掘ではピットらしきものを確認したが、擾乱の誤認であった。本区は、「二重環濠」の内側環濠の遺存の有無の確認も目的であったが遺構は全く検出できなかった。地山上面レベルを検討すると、隣接調査区の内側環濠の底面レベルよりもやや低く、削平され完全に消失したのであろう。

### III. 自然科学分析

那珂117次調査では、飛鳥時代(7世紀)の大型建物である2 C区SB01を構成する1柱穴(SP1001)より、柱材の一部の残片と考えられる木材片が出土した(Ph.10)。この木材片について、放射性炭素年代測定(AMS年代測定)および樹種同定の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託し、これを行った。以下は、株式会社パレオ・ラボによる分析報告である。



Ph.8 3 C区全景(北西から)

## 1. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薰・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

### (1) はじめに

福岡県福岡市に位置する那珂遺跡群117次調査より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同試料について樹種同定も行っている。

### (2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表4のとおりである。試料は掘立柱建物柱穴に遺存した柱材の一部である。試料とした木材の部位は最外年輪以外である。調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製15SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、曆年代を算出した。

表4 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11316	遺構:掘立柱建物	試料の種類:生材(イヌキ) 試料の性状:最外以外部位不明 状態:wet カビ:多い、カビを避けて採取し処理	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N) サルフィックス

### (3) 結果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代範囲を、Fig.4に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

#### ・曆年較正

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の曆年較正にはOxCal4.0(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表5 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を曆年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
PLD-11316	-25.90 $\pm$ 0.14	1746 $\pm$ 19	1745 $\pm$ 20	250AD(12.9%)263AD 277AD(55.3%)330AD	237AD(94.1%)349AD 370AD(1.3%)377AD

#### (4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。 $2\sigma$  暦年代範囲は、237–349 calAD (94.1%) および 370–377 calAD (1.3%) で、弥生時代終末期から古墳時代前期に相当する。なお、試料の採取部位が最外年輪以外であるため、得られた年代は枯死・伐採年より古いことを考慮する必要がある。

##### 〈参考文献〉

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425–430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代。3–20。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmelt, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029–1058.

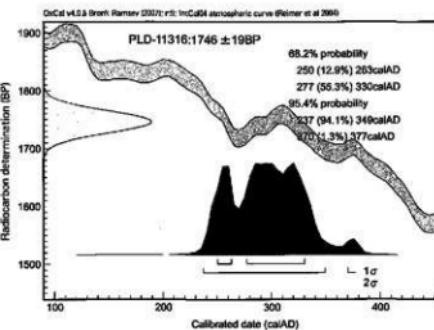


Fig.41 暦年校正結果

## 2. 木材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

#### (1) はじめに

那珂遺跡群117次調査では、ピットから木片が検出された。調査の知見では、柱材の可能性がある。ここでは、この木片の樹種同定を行った。なお、同一試料の放射性炭素年代測定も行っている（放射性炭素年代測定参照）。

#### (2) 試料と方法

木材試料は、C区P-1001から検出された木片である。試料は、木材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）について、剃刀を用いて薄い切片を剥ぎ取り、ガムクロラールで封入して、永久プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、光学顕微鏡で木材組織を観察・同定した。

#### (3) 結果

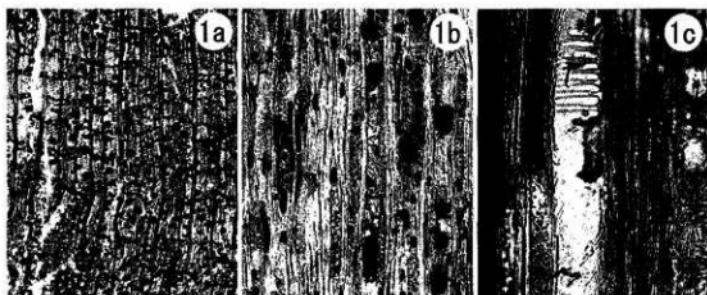
樹種を同定した結果、木材は、常緑広葉樹のイヌノキであった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

##### ・イヌノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 Ph. 9 1a-1c

小型でやや角ばった道管が一様に分布し、軸方向柔細胞が接線状1列に分布し、年輪界が不明瞭な散孔材である。道管の穿孔は10程度の太い階段穿孔である。放射組織は、異性1～2細胞帽、7～23細胞高であり、端部2～5細胞は直立細胞である。また、多室結晶細胞が顕著である。

イヌノキは、関東以西の暖帯から亜熱帯に分布し、暖地の山地に成育する常緑高木である。木材は、ソロバン球、心材は黒いので紫檀・黒檀の模擬材として利用される。



Ph.9 木材組織の光学顕微鏡写真

1a. イスノキ(横断面, No.2:スケール500 μm) 1b. イスノキ(接縫断面, No.2:スケール200 μm) 1c. イスノキ(放射断面, No.2:スケール50 μm)

### 3. 分析結果について

株式会社パレオ・ラボによる分析結果報告について、調査者（久住）のコメントを述べる。放射性炭素年代測定（AMS年代測定）については、近年、弥生時代開始年代を大幅に遡及させる分析結果の正否をめぐって論争がある。一方、より確実な暦年代資料との対比が可能な歴史時代資料の分析についての検討はあまり無いように思われる。そうした検討の一材料として提供するという目的と、木材片が出土した建物柱穴の詳細な時期がもし判明すれば重要であるという考え方で資料を分析委託した。

分析では、出土遺物などからみた考古学的に考えられる7世紀代という年代とはかけ離れた3～4世紀代という結果が出てしまった。ただし、これをもって木材の放射性炭素年代測定が無用であるということにはならない。分析資料は（Ph.10）、長さ16.3cm、幅8.3cm、厚さ20mm前後で、樹種同定からは常緑広葉樹のイスノキ材と判断されたものであるが、イスノキは時に樹齢数百年以上になる大木となる場合があるという（株式会社パレオ・ラボ 中村賢太郎氏教示）。木材は、出土状況からは柱痕の端に近い部位の残れと考えられるが、樹皮や辺材部分が残っているものではない。したがって、もし大木を伐採してそれを加工したものであった場合、木材の伐採年と柱材として利用し残存した部位の放射性炭素年代は数百年単位のズレが生じることがありうる、ということである。憶測を交えるが、古くよりあった大木を伐採してまでも建造されるような豪壮な建物を伴う官衙施設が造営されたということではないだろうか。また、イスノキがきわめて堅く非常に頑丈な建材であることも注目される。



Ph.10 分析木材資料

### IV. まとめ

#### ・飛鳥時代の大型建築物と周辺の官衙的造構群について

本調査では、大型建物SB01などの飛鳥時代の官衙的造構群を検出したが、これについて考察していく。2C区SD004は下層にIV-3期があるが、37・52次の同一溝にIV期前半があり（Fig.43）、当初の掘削はIV期初頭だろう。IV期後半により真北をとる方位の溝に掘り直された可能性がある。56次の南北建物SB01は（Fig.3）、古い土器もあるがIV-3期があり（Fig.43-15, 16）、これを切るSB02もそれ

が上限となる。117次SD004と時期が一致し併存する。52次SA09～117次SB01は、IV期末を上限とし（26頁、Fig.43-13, 14）、一度建替がありVI期に廃絶する。SB01は梁行6.5m×桁行9.6m以上の大型建物で、東西棟の「正殿」であろう。この西側に「脇殿」としてのSB02を想定した。なお56次SB01は、117次SB01（52次SA09）と同一区画とする案もあるが（比惠72次報告38頁、663集）、柱穴規模や柱間が異なり、時期も異なる（Fig.3は同一区画案を表示したが、訂正する）。117次SB01・02の区画としては、北が3 A区SD003、東は59次溝12と117次1 B区SD03、西は56次溝4～6（SB01の柱間を通る）が想定できる。これら溝はV期前後で、建物時期と一致する。南側は不明だが、東西70m×南北90m前後の区画を想定する。3 A区 SX009（V期）はこの区画の北東角の祭祀を示すか。IV期末～V期は660年代と想定される。SB01の梁行6.5mは、「石湯行宮」とされる松山市久米官衙遺跡群「回廊状造構」内の「正殿」の梁行7.0mに近い。多くの論証を必要とするが、那珂の官衙遺跡群は、「筑紫大宰」や齊明・天智天皇の「磐瀬宮（長津宮）」を含む可能性を真剣に検討すべきである。

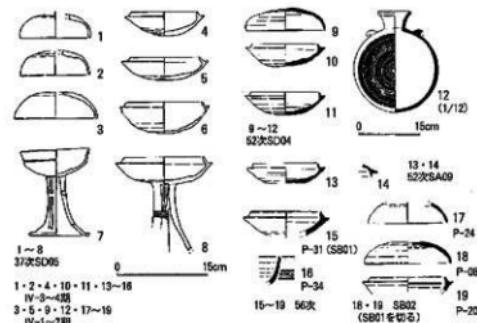


Fig.43 那珂37・52・56次溝および建物柱穴出土土器 (12以外 1/8)

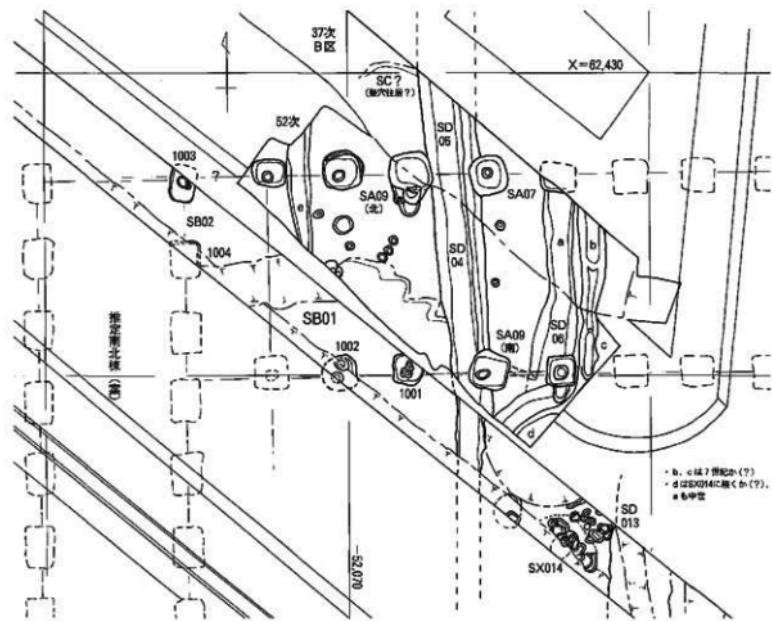


Fig.42 大型建物SB01とその周辺（復元想定図）(1/160)



1. 2C区全景 (SD004・SP1001, 南東から)



2. 3A区全景 (SX009・SD003, 南東から)



3. 2D区SP1003・1004(SB02?)掘削状況(南から)



4. 2C区SP1001・1002(SB01)掘削状況(南西から)



5. 3A区SX009完掘状況 (北から)



6. A区SD01土層 (西から)



1. 1A区SD01土層（北から）



3. 1B区SD07東側土層（北から）



4. 1B区SD03土層（北から）



2. 1A区SD02土層（西から）



5. 1B区SP08土層（東から）



7. 1B区SK（SP）05土層（北から）



10. 2B区SD013土層・掘削状況（南西から）



9. 2A区SX001土層（北西から）



11. 2C区SD004土層（北から）



12. 2C区SP1001土層（南から）



13. 2C区SP1002土層（北東から）



## (遺物写真)





1. 29-1 (上から)



4. 29-10 内底面



7. 29-2



2. 29-1 背部(閉合部)側



5. 29-10



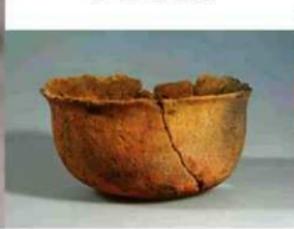
8. 29-2 环部外底(接合面)



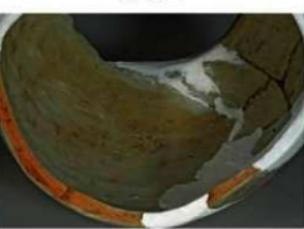
9. 35-7



3. 29-1 腹部側



11. 35-1



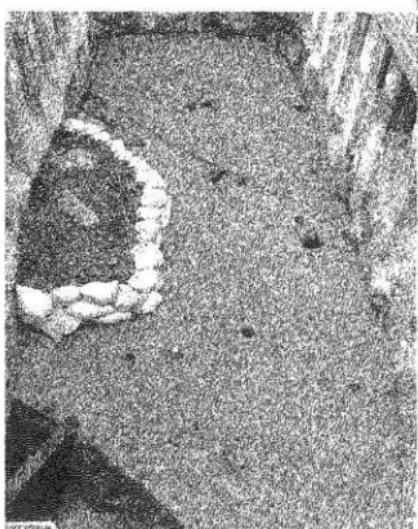
10. 35-7 脊部内面



12. 29-7 (左), 29-3 (右)



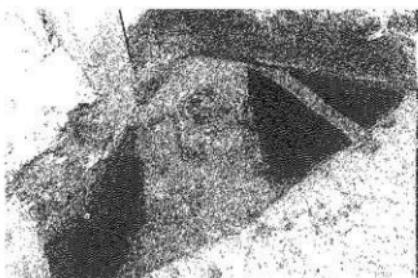
13. 35-8



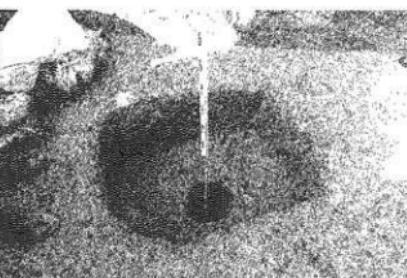
1. A区全景（北西から）



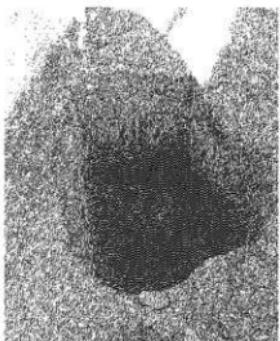
2. 1A区全景（北西から）



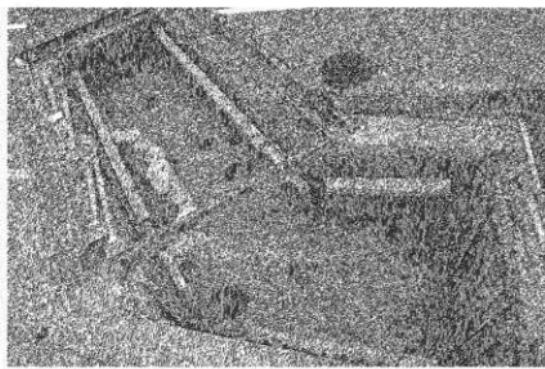
3. A区SDG1掘削状況（南から）



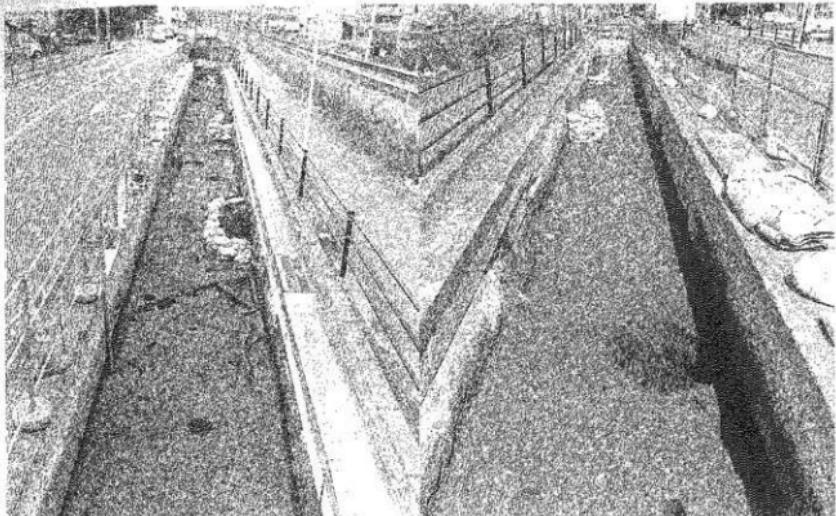
4. 1A区SK02完掘状況（南から）



5. 1B区SK05完掘状況（西から）

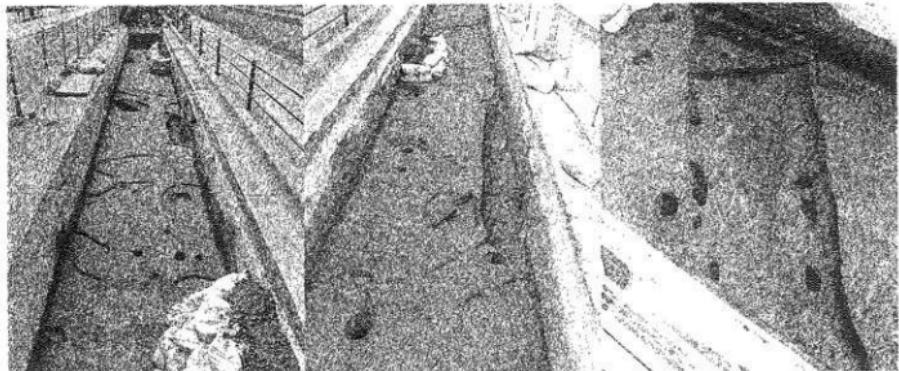


6. 1C区全景（南東から）

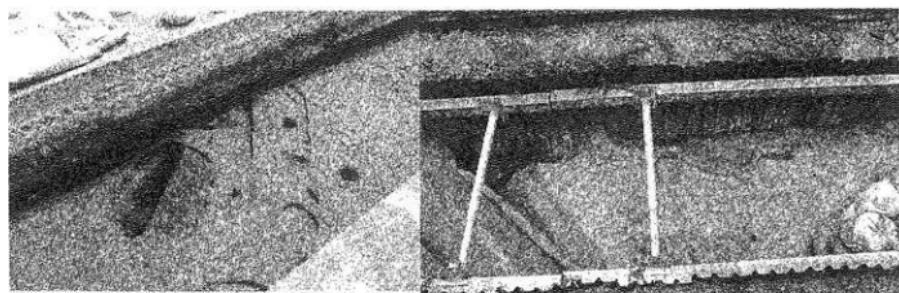


1. 1B区全景(北西から)

2. 1B区全景(南東から)

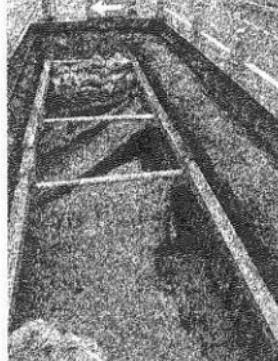


3. 1B区中央～東半調査状況(北西から) 4. 1B区西半調査状況(南東から) 5. 1B区SD003掘削状況(北から)

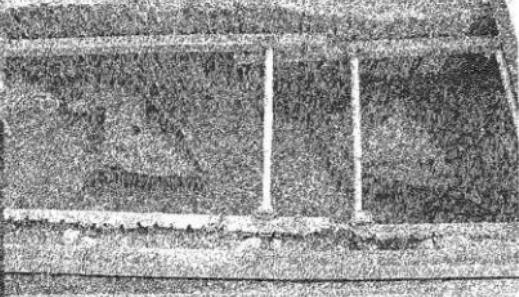


6. 1B区SK03, SD07掘削状況(南から)

7. 2B区SD0013(左), SX014ほか(右) 掘削状況(北東から)



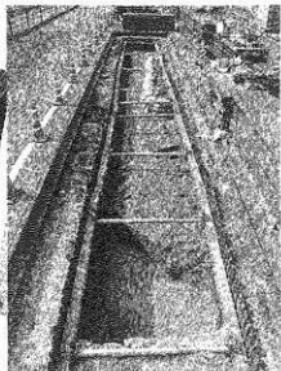
1. 2B区全景（北西から）



2. 2A区SX001(左), SX002(右) 挖削状況（北東から）



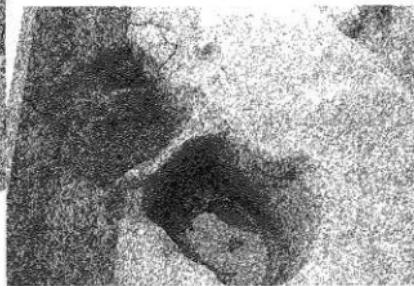
3. 2C区SD004（上層）遺物出土状況（北から）



5. 2D区全景（南東から）



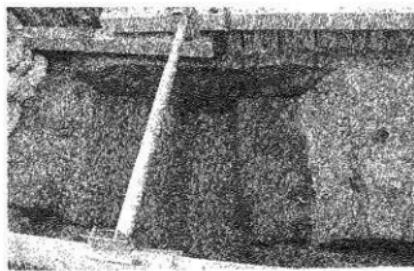
4. 2C区SD004（下層）遺物出土状況（北東から）



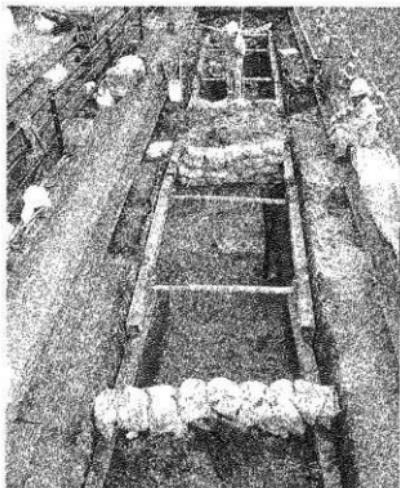
6. 3A区SP1011・1012, SX009掘削状況（南東から）



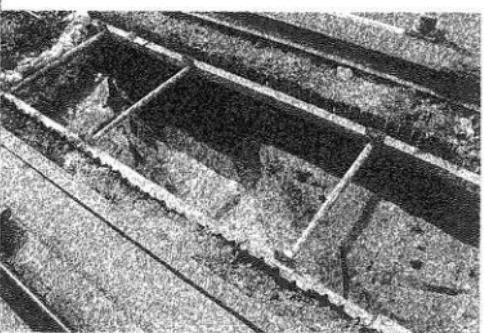
7. 3A区SX009完掘状況（北から）



8. 3B区SD001掘り直し溝掘削状況（南から）



1. 3B区全景・SD001掘削状況（北西から）

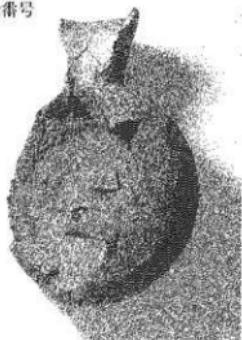


2. 3B区SD002完掘状況（北から）



3. 18-1

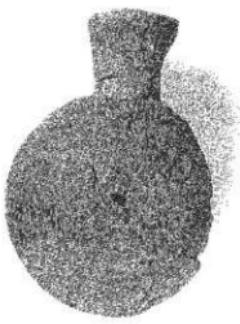
・遺物の数字は  
Fig番号



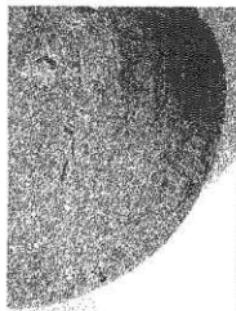
4. 15-1 (背部)



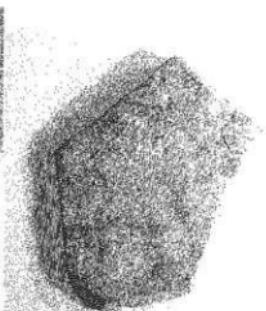
5. 15-1 (側面)



6. 15-1 (腹部)



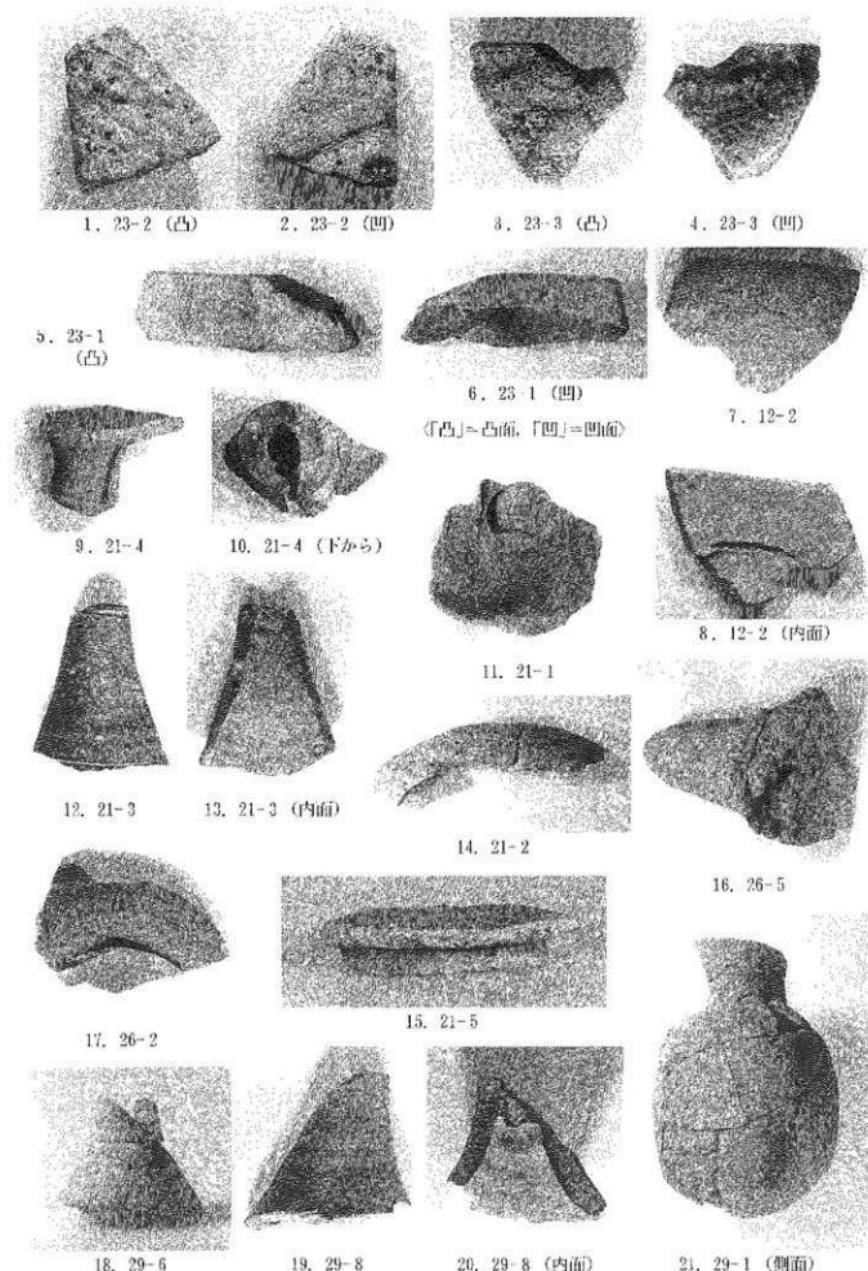
7. 15-1 腹部外面布目痕

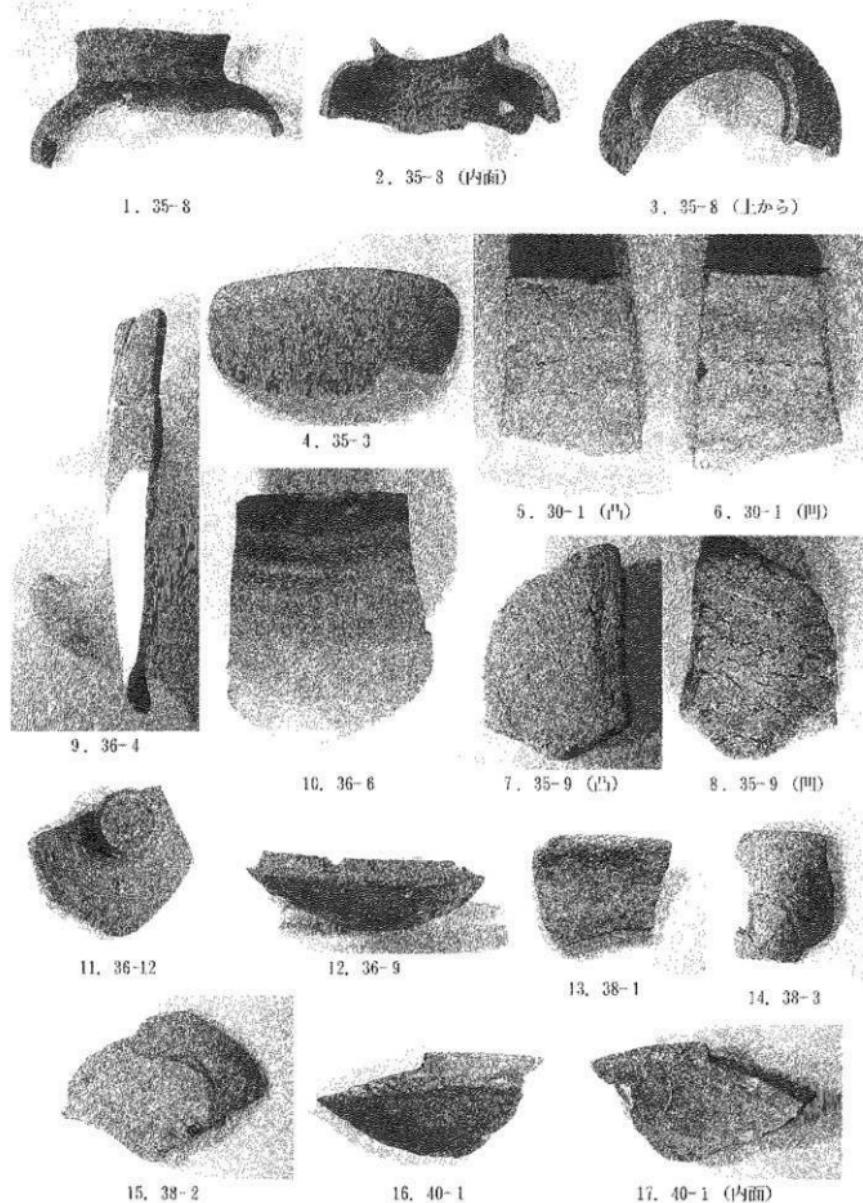


8. 11-1 (凸面)



9. 11-1 (凹面)





## 報告書抄録

ふりがな	なか53ーなかいせきぐんだい117じちょうさほうこくー
書名	那珂53
副書名	—那珂遺跡群第117次調査報告—
巻次	
シリーズ番号	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	1034
編著者名	久住延延（編集・執筆）（株）バレオ・ラボ（自然科学分析）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4867
発行年月日	西暦2009年3月31日

遺跡名ふりがな	なかいせきぐんだい117じちょうさ			
遺跡名	那珂遺跡群第117次調査			
所在地ふりがな	ふくおかしはかたなか6ちょうめない			
遺跡所在地	福岡市博多区那珂6丁目地内			
市町村コード	40130			
道跡番号	0085			
北緯(°)	33° 33' 56" (3C区) ~ 33° 33' 50" (B区)			
東経(°)	130° 26' 11" (3C区) ~ 130° 26' 17" (B区)			
調査期間	2007.06.04~2007.09.28			
調査面積(m <sup>2</sup> )	304.85m <sup>2</sup>			
調査原因	水道管埋設（送水管埋設）工事			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落、官衙	弥生時代	（弥生時代）遺溝！ （古墳時代後期・飛鳥～奈良時代）溝状遺構9+掘立柱建物4+井戸1+土坑（性格不明遺構含む）	弥生土器+土器器（古墳時代） 飛鳥・奈良時代、平安時代）+赤燒土器（土師質焼成須恵器または須恵器模倣土器）+須恵器+瓦（初期瓦）+褐色土器+瓦器+白磁+灰津+滑石製繩+砥石+柱頭木片	弥生時代早期～前期初頭の環濠、飛鳥時代前後の区画溝および掘立柱建物（初期官邸、「街面」）なし「筑紫大宰」などに関わる国家的施設の可能性）、中世前半期の屋敷地（館）をめぐら大溝
	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代～奈良時代、平安時代	3ほか （古代以降） 水路1+大溝1 （時期不明） 廻列6+土坑1ほか		

（註）世界衛地系による。また、調査区が非常に幅長いため、北西端と南東端の座標値を記入した。

## 埋蔵文化財調査基本情報一覧表

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	117次	調査略号	NAK-117
調査番号	0717	分布地図編名	38. 塙原-24. 板付	遺跡登録番号	0200685
事前審査番号	19-1-14	調査原因	水道管埋設工事	申請事面積	651m <sup>2</sup>
調査期間	平成19年(2007年) 6月4日～同年9月28日	調査面積	304.85m <sup>2</sup>		
調査地	福岡市博多区那珂6丁目地内（道路用地内）				

